TOTO 通信

2025年春号

Toward a Creative Architectural Scene



特集

Special Feature

Architect's Organization Theory

建築組織論——設計チームのつくり方

設計チームのつくり方

複数人で建築を設計する時のチームづくりに注目する。
たとえば、相性のよい人同士が集まったり、
あるいは異なる感性の人があえて集まることもあるかもしれない。
さまざまな職能の人が集まって事務所を開くこともあるだろう。
そもそもひとりと複数人とで、どのように創造性は変化するのか。集合の力を生かす方策とは。
今までもチームでタッグを組んだ設計組織はあったが、
最近では集団で物事を考えることにかなり意識的な建築家が増えてきたように感じられる。
3人、4人、いや5人。トップを決めずに複数人が膝を突き合わせる。
チームで設計することにこだわる建築家たちを取材した。

Case Study 1





Ebina
Art Freeway

Inoue Gaku
Natsumeda Kumiko
Akatsuka Ken
Kiyohara Yui
Mino Arata





+GARDEN

Nagahori Miki
Kono Wataru
Enomoto Kimiko
Nishida Osamu
Mangyoku Naoko

Case Study 2






	4
「+GARDEN」	10
「海老名芸術高速」	18
「Blue Box Office」	26
「残像の家」	34

シリーズ　古写真でみる建築家のアトリエ9
ヨーン・ウッツォン　文／山村 健 42
現代住宅併走60
「旧渡辺甚吉邸」　設計／遠藤健三、山本拙郎、今 和次郎　文／藤森照信 44
最新水まわり物語67
大阪ヘルスケアパビリオン 50
TOTOギャラリー・間で展覧会をします
篠原一男 空間に永遠を刻む——生誕百年 100の問い 56
News File
TOTO News, Cera Trading News, Book 58

表紙／「残像の家」の居間とウルトラスタジオの3人。
撮影／山内紀人
編集制作／伏見編集室　デザイン／岡本一宣デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

特集／建築組織論——

Special Feature

Architect's Organization Theory

Case Study 3







Blue Box Office

Inagaki Junya
Sano Satoshi
Nagai Takuo
Hori Eisuke
Hayata Hirotaka





Case Study 4



After Image

Mukaiyama Yuji
Ueno Alyssa
Sasada Yushi





TOTO 通信

Toward a Creative Architectural Scene
Number 538
Spring 2025

対談	巨匠からチームへ	酒谷粋将×山村 健
ケーススタディ1	ボスの名前を表記しないチームの個性	長堀美季+河野 航+榎本季美子+オンデザイン
ケーススタディ2	映画監督も写真家も設計者	GROUP+清原 惟+三野 新
ケーススタディ3	異なる職能の結集と放浪	稲垣淳哉+佐野哲史+永井拓生+堀 英祐／Eureka+早田大高設計事務所
ケーススタディ4	思想を同期させる「ウルトラ会議」	ウルトラスタジオ

『TOTO通信』はインターネットでもご覧いただけます。 https://jp.toto.com/pages/knowledge/useful/tototsushin/

巨匠から

特集／建築組織論——設計チームのつくり方

Special Feature
Architect's Organization Theory Discussion

対談



酒谷粋将＋山村健

酒谷粋将（共同設計の研究者）

山村健（連載「古写真でみる建築家のアトリエ」執筆者）



多様な価値観を建築に盛り込むために

——酒谷さんは、複数の人びとの対話を通したデザインプロセスなどの設計理論を研究しながら、藤原酒谷設計事務所を共宰し実践にも取り組んでいらっしゃいます。山村さんは『TOTO通信』の連載「古写真でみる建築家のアトリエ」にて世界中の建築家たちの組織について執筆いただき、スペインやフランスでの研究や設計経験も豊富なことから、海外の状況に精通されています。今回はそんなおふたりとともに、チームで対話を重ねながら設計に取り組む意義や可能性を探っていきたいと思います。

酒谷　そもそも共同で取り組むことをドライに考えると、メリットとしては分業による効率のよさや、合理的にタスクをこなせることが挙げられます。ただこうした縦割り的な組織のあり方は前時代的ともいえ、今の設計活動におけるコラボレーションをみると、タスクをこなすだけにとどまらない、協働性に価値を置いている傾向があるように思います。いかに多様な価値観や思想を盛り込めるか、というところですね。

——西田司さん（10〜17ページ）はユニークな組織論を実践されていて、主宰するオンデザインではスタッフを「パートナー」と呼び、同じ設計者として接しているようです。さらに故郷を事務所の支部にして副業を認めることもあるとか。また「自由研究制度」として週に一日は何をしてもよい、というのもユニークです。西田さんいわく、ひとりの感性だけで建築をつくっていくことに限界を感じて現在の体制に至ったとのことですが、どのように思われますか。

酒谷　私も西田さんの組織論には興味をもっており、常に他

者との「対話」を求めている印象を受けています。単なる情報のやりとりではなく、その背景にある思想や哲学にまで踏み込んで対話をする。オンデザインに限らずさまざまな設計組織をみていると、異なる価値をいかにひとつの建築に詰め込んでいくかが、今の建築を読み解くキーワードであるように思います。

山村　建築として立ち現れるものの背景には、どのように組織をつくるか、という視点が大きな影響をおよぼしています。設計事務所の最近の動向をみていると、どのような相手とコラボレーションしていくか、というところを重視する新しいサイクルが生まれているように思います。実際に建築系の雑誌などのメディアにおけるクレジットを見ても、時々西田さんの名前は前面に出ず、コラボレーターやプロジェクト担当者の名前が真っ先に目に入るのも、興味深いところです。かつての巨匠の名前しか取り上げられなかった時代と比べると、明らかな変化の兆しがみられます。

酒谷　組織は社会と対応していると考えています。かつてはどんどん建築をつくっていくという機運や明確な目標がありましたが、パンデミックを経た今、何が起こるか読めない予測不可能な社会になっています。時には巨匠という一主体が統括する組織では対応しきれない場面もあり、それぞれが十分に主体性をもった、いわば自律分散型のトップダウン的ではない組織体で柔軟に対応していくようになった、とも考えられるでしょうか。実践者それぞれが体感しているものを建築に反映していくのは、複雑化した今の社会を映し出す現象なのかもしれません。

多様な価値観や思想を
いかにひとつの建築に
盛り込めるか。

Sakatani Suisho



地域住民と対話しやすい組織づくり

――予測が難しい脱成長社会ならではのムーブメントともいえますね。アートとコミュニティの融合を探求するイギリスの設計集団・アッセンブルも、新築よりもリノベーションを多く手がけています。

酒谷　アッセンブルの活動は、建築とアートの融合に積極的ですが、建築家が設計以外の領域にも手を伸ばしていることにも特徴があると思います。建築家の職種自体が変わりつつあるのかもしれない。

山村　歴史をさかのぼって戦後モダニズムから考えると、やはり建築の世界はスター的な巨匠の活躍により形成されてきましたよね。対して脱成長時代では、コミュニティのなかに建築家がいる。アッセンブルは2010年の結成時にはすでに15人いて、ひとりかふたり増えたり減ったりするものの、基本的に大所帯なのは変わっていない。そして建築家だけでなくアーティストもデザイナーもおり、さらにそこに市民が交ざってくるので、建築家が権威的なリーダーにならずにニュートラルに議論が進む。土台づくりとして、巧妙かつユニークな方法だと思います。

最近は日本もコンペ形式ではなくプロポーザルが増えましたが、やはりひとりでは地域

脱成長時代では、
コミュニティのなかに
建築家がいる。

Yamamura Takeshi

ひとりの巨匠が率いるような設計事務所ではなく、
複数の個人がゆるやかにつながりながら、
設計チームを構成する事例が目立つようになってきた。
そのつながり方も、メンバーの集まり方や役割分担において、ますます多様になってきている。
こうした傾向にはいったいどんな背景があるのだろうか。
それぞれ建築家の組織論を研究しながら、自身も設計事務所を主宰する
建築家であるふたりに、国内外の設計組織について話をうかがった。

聞き手／伏見 唯　まとめ／植林麻衣

チームへ


Sakatani Suisho

組織をつくってから
実践するのではなく、
実践からコミュニティができていく。

Special Feature
Architect's
Organization
Theory
Discussion

に入っていきにくい難しさがあると思うんですよね。チーム内ですでに多様な価値観をもっていると、住民とフラットな関係性を築きやすいのではないでしょうか。

酒谷　「コレクティブ（集団）」であることがアピールポイントになりますよね。ワークショップで出てきたアイデアを新しいデザインの発想の種として積極的に取り入れる、予定調和に陥らない設計手法にも注目しています。もちろん今もなお、集団やコミュニティを牽引あるいは突破するパワーをもつ「個」の存在も、必要だとは思うのですが。

山村　建築学科の学生にどんな事務所で働きたいかと問うと、建築家の作風よりも、「どのように、誰とつくっているか」というところに共感しているようです。建築家の職能としても、建築表現としての図面を描くというプライオリティから、住民に伝えるために本をつくったりマンガを描けたりするのか、というかつての設計事務所の範疇からは想像しえない方向へシフトしている傾向もみられますよね。

DIYは人を巻き込む力をもっている

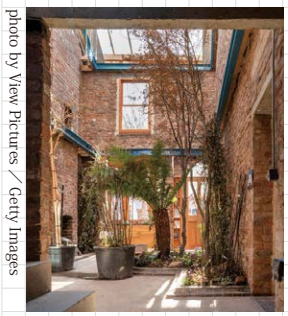
――GROUPは井上岳さん、棗田（なつめだ）久美子さん、赤塚健さんたちが共宰する設計コレクティブですが、「海老名芸術高速」（18〜25ページ）では、映像作家やアーティストとも協働し、さらに住みながら、可能性を模索しています。

山村　自分たちで手を動かしたり実践したりする、というところにも価値や新しさがみられますよね。かつての巨匠がDIYをする姿はあまり想像できないかもしれませんが、アッセンブルも住民たちとのDIYに積極的に取り組んでいます。

酒谷　シェアハウスやDIYというのも、設計コレクティブにみられる顕著な現象で、それは建築をつくる過程で関係者を増やす行為ともとらえられます。社会学には「実践共同体（Community of Practice）」という、なんらかのテーマに対する関心や熱意を共有して相互交流のなかから知識や技術を深めていく、という集団形成に関する社会的枠組みを示す概念があります。つまり、組織をつくってから実践するのではなく、実践のまわりでグラデーショナルなコミュニティができていき、求心力が高まっていくということなのですね。建築に置き換えてみると、施工は関連する人を爆発的に増やす行為で、はじめは関係者でなくとも自分の街のなかで起きている実践が目で見てわかるので、受けるインパクトが強く、当事者として参加しやすい。必然的に求心力が上がるので、いつしか建築そのものが目標ではなく、つくる活動自体に人が集まります。

――DIYとコミュニティの活発化は相性がよいというわけですね。

山村　価格ではなく価値を求めるクライアントが増えてきている、という背景もあるのではないでしょうか。いくらコストをかけたか、というラグジュアリーな建築ではなく、価値や協働のプロセスをクライアントが重視するようになった。


photo by View Pictures／Getty Images
グランビー・フォー・ストリーツ／イギリス、2013年〜

アッセンブル
ASSEMBLE
2010年、ケンブリッジ大学で建築を学んだメンバーを中心に15人で結成されたコレクティブ（集団）。建築からアートやデザインまで領域を横断しながら、地域コミュニティを修復するさまざまなプロジェクトに取り組む。リバプールのグランビー・フォー・ストリーツでは、実際にメンバー数名が街に住み込み、地域住民とともに荒廃した住宅街を再生した。2015年にターナー賞を受賞。


photo by Mark Runnacles／Getty Images

建築家だけでなくクライアントの考えもシフトしてきていますよね。

ただし作家性がないがしろにされているわけではありません。たとえば「建築界のノーベル賞」とも呼ばれるプリツカー賞を2017年に受賞した、カタルーニャの設計コレクティブ・RCRアルキテクタス（9ページ）は、複数人でつくっているのに誰が見てもRCRの作品だ、という強い作家性を放っています。作家性を求める集団性というものも、大切だと思います。

同じだからよい異なるからよい

――RCRアルキテクタスはどのようなプロセスを経て設計しているのでしょう。

山村　スペイン・カタルーニャ州のジローナ県オロット出身の3人がコアメンバーで、のどかな時間が流れる土地に根ざして設計活動をしているのですが、スタッフの話では、3人それぞれ言うことが異なるのでかなり忍耐力が試されるそうです（笑）。ただその違いがスタッフのあいだで醸成されて、結果的にまとまっていくのですね。そのときに、風土や受けた教育背景が共通しているという価値観は変えがたいものだと思います。RCRアルキテクタスがおもしろいのは、素材に対する感性も共有していることだと思います。稲垣淳哉さん・佐野哲史さん・永井拓生さん・堀英祐さんによるEureka（26〜33ページ）はみな、早稲田大学出身で、それぞれ計画、意匠、構造、環境と分野は違いますが、受けた教育が同じという点で、共通の何かをもちながらも、刺激的な創発が起きているといえます。

――意匠や計画だけでなく、構造や環境の面からも設計が練り上げられる関係性は独特です。大学の同世代であることが職能を超えた設計プロセスを生み出しているのだと思います。

酒谷　専門外の領域でも自身の専門性を生かせる「トランスファラブルスキル（Transferable Skill）」が設計で実践されているわけですね。ただ分野の融合・横断は、専門外の分野に一度どっぷり浸かるくらいでないといけないかもしれません。バイオテクノロジーを応用したプロダクトデザインにおいて、まずは生物学の専門を徹底的に学ぶ、というケースもあります。コラボレーションするためのスキルでもあるんですね。

――一方で向山裕二さん・上野有里紗さん・笹田侑志さんによるウルトラスタジオ（34〜41ページ）は、海外で建築を学んだ経験という共通項はあるものの、出身校も得意分野も異なる3人による設計コレクティブです。そのためか、意図的に共通言語をつくるために、毎週、頭脳を同期させるような会議（ウルトラ会議）を催しているとのことでした。

酒谷　コレクティブの歴史をさかのぼれば、1986年に結成されたシーラカンス（現・CAt）のように、まずは身近な仲間で集まる方法がありますよね。ウルトラ

一方で、作家性を求める集団性も大切。誰が見てもわかる強い作家性を放つ集団もある。



酒谷粋将

さかたに・すいしょう／1988年大阪府生まれ。2011年京都大学工学部建築学科卒業。同大学院修士課程を経て、15年博士課程修了。19年関東学院大学建築・環境学部専任講師、22年同大学准教授を経て、25年京都大学大学院工学研究科建築学専攻准教授。20年より藤原真名美とともに藤原酒谷設計事務所を共同主宰。博士（工学）。



スタジオは上野さんが建築を学ぶ前に視覚文化論を修めるなど、異質な領域も含むところが戦略的だと思いました。

――向山さん・笹田さんはスイスに留学し、上野さんはイギリスで学んだ経歴をもっていますが、学生時代の話をうかがっていると、チームを組むケースが一般的だったそうです。ヨーロッパという背景もあり、国境を越えてコラボレーションすることも多かったとか。違う国の出身者が集まると、どのようなことが起こるのでしょう。

山村　よくも悪くもハレーションが起こると思います（笑）。じつは私もその当事者でして、パートナーはスペイン・バルセロナ出身で、母国語はもとより、建築言語が違う。日本では素材を現しで使う文化が根付いていますが、ヨーロッパでは組積造でレンガを積んだ上に塗装するように、素材の扱いひとつとっても意見が異なるのです。ふたりで話しあうことで結果として事務所（YSLA Architects）ならではの建築スタイルは生まれるけれども、日本の建築事務所としてカテゴライズできるのかどうか、ローカリティについて模索しているところです。ふたりだと意見が二分されて平行線をたどるときもあるので、もしかしたらウルトラスタジオやRCRアルキテクタスのように3人目が必要なのかもしれない。

酒谷　藤原酒谷設計事務所は大阪と京都という関西圏出身なので、山村さんのように、風土という多様性や異質さと向きあうのも楽しそうだと思いました（笑）。ただ、私たちも、建築的なバックグラウンドは異なるので、幅木ひとつにしても、納め方に対する感覚の違いがあります。いずれにせよ建築のベースがまったく違うのなら、どう統合していくのか、ということが問われるのですが、そうしたアプローチも、創造的で実践的なノウハウだと思います。

チームによる設計行為は最先端か

――かつての設計コレクティブは身近な仲間同士で自然発生的に生まれた印象があるのに対し、今回の取材では、集団であることに努めて意識的であるように思いました。なぜコレクティブとして集団で設計するのか、そしてどのような時代背景があるのでしょうか。

酒谷　設計プロセスの研究のキーワードのひとつとして「アブダクション（abduction）」という、仮説生成をする際の思考の展開メカニズムを説明する概念があります。建築でいえば、設計要件に対してデザインという仮説を出すわけですね。その思考のスタートポイントでは、なんらかの驚きが必要となります。自分ひとりで想像していることの枠外にある気づきがあり、そこから思考の領域を広げてアイデアを創造する。つまり、自分の環境のなかに驚きをつくることができるか、ということが大事になってくるのです。これを突き詰めると、自己ではない他者を求めるということになり、こうした新鮮さを積極的に求めていく風潮が、コレクティブにはあるのではないでしょうか。

山村　出身校である早稲田大学では、卒業設計を意匠・構造・環境など専門の異なる3人が集まり共同で取り組むのですが、それが始まったのは私たちの代からで、2005年のこ

とでした。卒業設計はひとりで取り組むものだと思っていたのに、古谷誠章先生は、これからは共同設計の時代、誰とどんな建築を考えるかが重要になる、とおっしゃったのです。まさに、20年たった今、チームの時代を迎えているわけですよね。社会的にもひとりに説明責任を求めなくなっており、共同でやることに活路を見出すようになっているのは、興味深いところです。

――先ほど話に出た、若い世代は作風という結果よりもつくるプロセスに興味をもっているのではないか、という指摘も、時代を読み解くヒントだと思いました。

山村　東日本大震災の影響もあるのかもしれません。復興では自分ひとりがどうというよりも、みんなで取り組まないといけない、という意識が共有されたのではないでしょうか。またヨーロッパも地球温暖化という大きな問題に直面し、個としての建築が問われる時代ではない。建物単体ではなく、環境性能を含めた価値にクライアントは重きを置くようになっています。

酒谷　建築がゴールではなく、その先で何ができるのかが問われることになるでしょう。もしかしたら課題を解決するツールが建築だけではなくなる時代を迎えるかもしれませんね。建築はメインであれども、そこに何をプラスできるか、ということに重きが置かれる予感もします。

――チームでの設計が求められる時代といえるでしょうか。

酒谷　かつて縦割り的に役割を分けていたものが、あらためて集まって一緒に混ざろうとしているのかもしれません。一度分解されたものが、再統合という過程を経ることで、ブラックボックスだったもののメカニズムが目に見えるようになるとしたら、今私たちがすべきことは、その構造やプロセスの記述ではないでしょうか。歴史の波のなかでこのコレクティブによる設計行為がどこへ向かうのか、観察していきたいと思います。

山村　チームによる設計行為は最先端ともいえる一方で、昔からあるものだととらえることができます。アントニ・ガウディ（1852～1926）は、大工のいる工房に入って事務所を開設し、さまざまな人と協働しながらDIY的に自ら手を動かして建築をつくった。ル・コルビュジエ（1887～1965）も事務所に多国籍で多様なバックグラウンドをもつスタッフを集めたのは、今のオンデザイン的な方法の原点ともいえる。アッセンブルも現場に参加して手を動かしていますが、イギリスでウィリアム・モリス（1834～96）が主導したアーツ・アンド・クラフツ運動の流れを彷彿とさせます。巨匠の時代の歴史が断絶して今のコレクティブがあるのではなく、組織として俯瞰したときに、つながりが浮上するのはおもしろいですよね。チームだからこそ巨匠を超えるインパクトのある建築を、自らも実践者として模索したいですし、一歩引いてみても、これからの世界の動向が楽しみだと思います。



山村　健

やまむら・たけし／1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。同年バルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。12年同大学院博士後期課程修了。12～15年ドミニク・ペロー・アルシテクチュール勤務。16年ナタリア サンツ・ラヴィーニャとともにYSLA Architectsを設立。早稲田大学専任講師などを経て、20年東京工芸大学准教授。博士（建築学）。


©RCR

RCRアルキテクタス
RCR ARQUITECTES

1988年、ラファエル・アランダ（左）、カルマ・ピジェム（右）、ラモン・ヴィラルタ（中）の3人によって、スペイン・カタルーニャ州のオロットで結成されたコレクティブ。名称は3人の名前のイニシャル。ヴァレス建築学校（ETSAV-UPC）でともに建築を学んだ3人は、都市部ではなく地元のオロットを拠点とし、現在に至るまで建築設計活動を続けている。2017年プリツカー賞受賞。


©RCR

スーラージュ美術館／フランス、2014年

ボスの名前を表記しないチームの個性

取材・文／大井隆弘　写真／川辺明伸

Special Feature
Architect's Organization Theory
Case Study
1



Profile



長堀美季

Nagahori Miki

ながほり・みき／1989年大阪府生まれ。2012年大阪工業大学卒業。アトリエKUUを経て、19年オンデザイン。



河野 航

Kono Wataru

こうの・わたる／1993年千葉県生まれ。2015年芝浦工業大学卒業。aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所を経て、20年オンデザイン。



榎本季美子

Enomoto Kimiko

えのもと・きみこ／1989年神奈川県生まれ。2012年日本女子大学家政学部住居学科卒業。設計事務所勤務を経て、19年オンデザイン。



西田 司

Nishida Osamu

にしだ・おさむ／1976年神奈川県生まれ。99年横浜国立大学卒業後、SPEED STUDIO共同主宰。2004年オンデザイン設立。19年東京理科大学准教授。



萬玉直子

Mangyoku Naoko

まんぎょく・なおこ／1985年大阪府生まれ。2007年武庫川女子大学生活環境学科卒業。10年神奈川大学大学院修了後、オンデザイン。24年佐賀大学准教授。

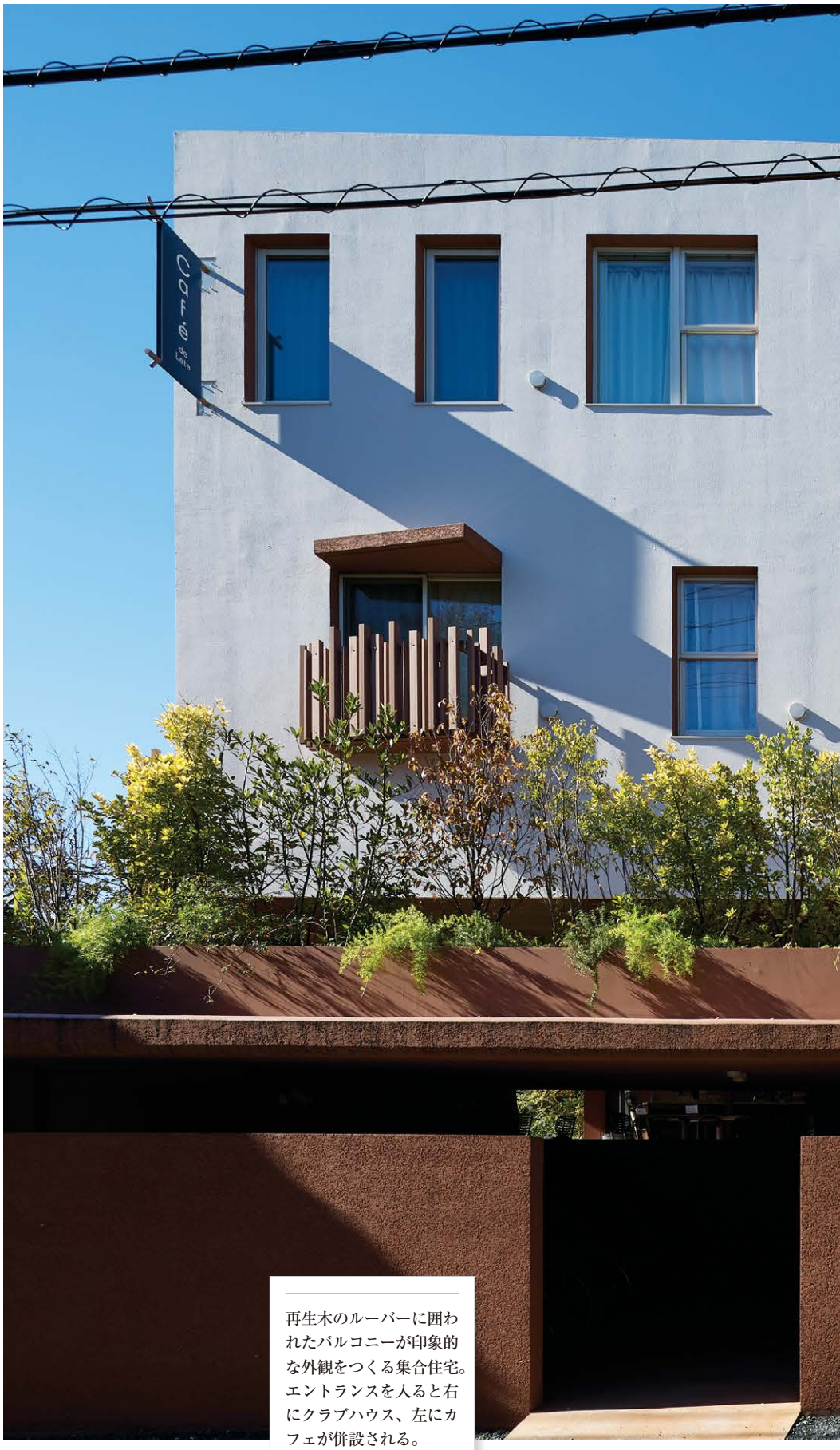
作品

+GARDEN

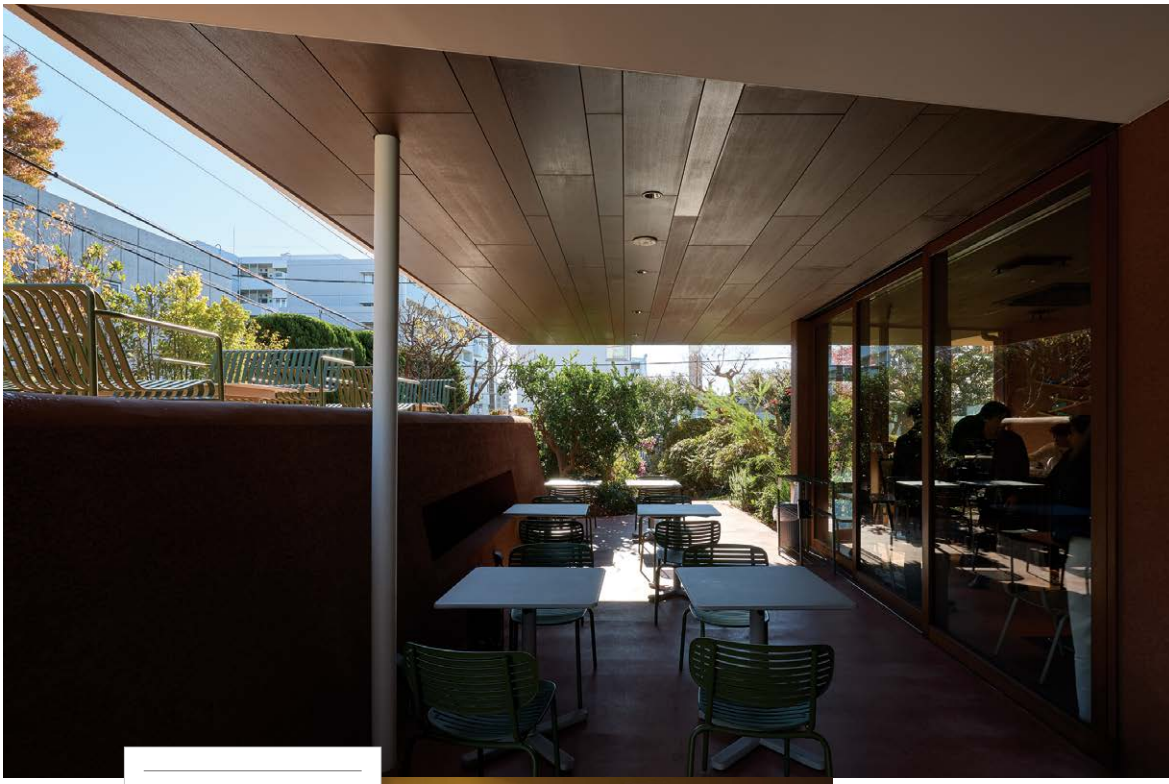
設計

長堀美季＋河野 航＋榎本季美子＋オンデザイン

西田司さんが主宰する設計事務所・オンデザインでは、長らくパートナー制が採用され、担当スタッフと西田さんの共同設計として、「○○+西田司」のように連名で作品発表がなされてきた。しかし最近の作品では、「○○+オンデザイン」とクレジットされるのみで、西田さんの名前が入らないことも少なくない。オンデザインの組織運営に何か大きな変化があったのだろうか。現在進行形のオンデザイン組織論を掘り下げたい。



再生木のルーバーに囲われたバルコニーが印象的な外観をつくる集合住宅。エントランスを入ると右にクラブハウス、左にカフェが併設される。





写真上／カフェのテラス席。左の一段上がったカフェテラスの下は駐輪場。下／カフェ内観。



設計事務所が作品を発表する際、代表を務める建築家と所員とがフラットな関係で表記されることはあまりない。ましてや、所員の名前だけになることは稀だ。思いつくのは、オンデザインくらいだろうか。オンデザインとは、50名ほどの規模をもつ設計事務所で、これまでも代表と所員がフラットな関係で設計を進める「パートナー制」を導入して注目されてきた。しかし、そのあり方は、現在も進化を続けているという。オンデザインが手がけた、西馬込にある集合住宅「+GARDEN」1階のカフェにお邪魔して、代表の西田司さん、チーフデザインオフィサーの萬玉直子さん、設計を担当したチーフの長堀美季さんに話をうかがった。現在の組織を知るための3つのポイントがあるという。

地方の拠点が増え多中心の構造へ

オンデザインの本社は横浜にあるが、新潟や石川、大阪、福岡にも拠点がある。たとえば、萬玉さんは昨年から佐賀大学に着任したのを機に福岡に移住した。また、長堀さんも横浜から地元大阪に移住。関東の仕事もこなしつつ、「関西支部長」を務める。

西田さんいわく、「きっかけは、大沢雄城（ゆうき）さんというパートナーでした。彼は現在、地元新潟でまちづくりや設計の活動をしています。当初は横浜勤務でしたが、新潟でネットワークを築きながら徐々に拠点を移しました。もちろんオンデザインの仕事も続け、逆に仕事をとってくることもあります。このように、最近は地元を拠点とするパートナーが増えてきました」とのこと。地域に溶け込むことで、都会とは異なるセンサーが働くようになる。都会の感覚で地方に建築を設計するのではなく、地域の営みのなかでしか生まれてこない建築に取り組むべきだ。西田さんはそんな考えをもっているようだ。

続けて萬玉さんも「地元に愛着をもつパートナーは多いですね。ふつう地元に帰ることは独立を意味しますが、多様な建物の設計にかかわれる環境がオンデザインにはあるので、それを継続しながら地元にも貢献できる働き方

パートナーの裁量を
最大化することが、
組織の豊かな
クリエイティビティへとつながる。



庭園から見えるテラス席。テニスのクレイコートに近づけるように赤茶色で塗装。

には魅力を感じます。パートナーがそれぞれ地元を拠点に活動する多中心の構造になってきました」と言う。しかし、なぜそんな働き方が可能なのか。

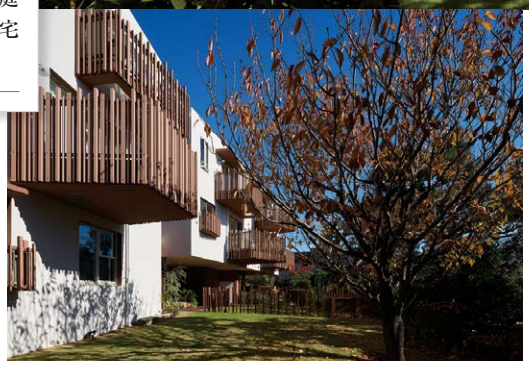
週の20%は自由研究の時間

この多中心の働き方を支えるのが、週の20%、つまり平日1日を自由研究の時間に充ててよいというルールだ。自由な時間からアイデアが生まれるというGoogle社の「20%ルール」を参考にした。副業を推奨しているわけではないが、パートナーはその時間を利用して多様な研究活動ができる。子ども向けの絵画教室をする人、グラフィックの仕事をする人、なかにはカレー屋さんも。長堀さんは銭湯を通してコミュニティのあり方などを研究。旅館の浴室をリノベーションするプロジェクトも担当している。十人十色、じつに多様である。

ちなみに、このルール導入は会社の規模拡大とも関係があったとか。西田さんによると、「2016年頃から毎年4、5人の若手が入社するようになり、その教育が課題になりました。そのため、自ら学びを深める時間を確保してもらう意味もありました」とのこと。萬玉さんも、「私が入社したのはこのルールのない時期で、最初は設計について議論するのも大変でした。でも、あるとき大学で研究していた内容と関連付けて提案したら、ちゃんと議論できたんです。専門性をもつ重要性を感じ



写真上／南側外観。それぞれ角度をつけたバルコニーは庭園の樹木と呼応する。下／既存の屋敷庭を継承しながら集合住宅を新築した。



た瞬間でした」。自由研究は、新人教育やベテランと若手が同じテーブルで議論する環境を整え、かつ多中心の働き方ともうまく噛みあっているようだ。

パートナー制からプロジェクト制へ

それでは、3つ目の「パートナー制」の変化にせまろう。西田さんは、「04年に事務所を立ち上げましたが、しばらくするとクリエイティビティの限界を感じるようになりました。10作品、20作品と設計をすると、以前と似た設計になってしまうんですね。そこで、08年頃にパートナー制を導入したんです」と経緯を話す。以降、プロジェクトは「西田司＋○○」という表記に変わった。また最近は、プロジェクトごとにチームを組む「プロジェクト制」に移行。その結果、西田さんの名前がないプロジェクトも出てきた。その意義を西田さんは次のように話す。「クリエイティビティを発揮するためには、課題やテーマの設定が不可欠です。一般的な事務所では、代表がその方針を決めますよね。しかし、それがない場合は、自ら考える必要がある。得意なことや大学での設計教育で培った個性をチームでぶつけあう。それが豊富なクリエイティビティをもたらすと考えています」

事務所では、西田さんが年に1度、パートナーと面談をして状況や希望を聞きとり、興味を発揮できそうなプロジェクトを打診する。この＋GARDENも、中途採用で入社した長堀さんに声をかけ、同時期に中途採用で入社した、榎本季美子さん、河野航さんと3人で取り組むことになった。どんな建物か見てみよう。

思い出の詰まった庭園を生かす

＋GARDENは、西馬込の丘の上にあるRC壁構造3階建ての集合住宅。建物の北にはテニスコートが5面あり、「パコーン、パコン」とラケットの音が心地よく響く。建物の南には樹齢100年を超えるような大木が囲む芝生の庭園が広がる。その庭園に対して、さまざまな角度で突き出した各住戸のテラスが印象的だ。

長堀さんは、「敷地にはもともとオーナーが育った屋敷があり、この庭園も子どもの頃からの思い出が詰まった大切な場所でした。そのため、建物も庭園との関係を重視し、建物の視点から考える人、庭園の視点から考える人と、チームで役割を分担して設計を進めました。大きなテラスも庭園との一体的な暮らしができるように検討した結果

で、それぞれ対面する桜やスダジイ、サルスベリといった樹木の見え方や景色を意識して角度をつけました。手すりのルーバーは、粗密2種類のパターンを用意し、凸凹も設けて庭園となじむよう工夫しました」と説明する。カフェも外壁や軒裏の仕上げを内部まで延長して、庭園とのつながりを強調しているようだ。

住戸へのアプローチも、庭園の中ほどまで進む必要があり、庭園を身近に感じる工夫がある。住戸は集会室含め18戸。間取りは1LDKから2LDKとさまざまだが、いずれも四角形の整った形状にまとめている。そのうえで、街並みに合わせるように、住戸のまとまりに角度をつけた。そのため、共用部に動きが生まれ、テニスコートや遠く富士山へ視界が開けた。



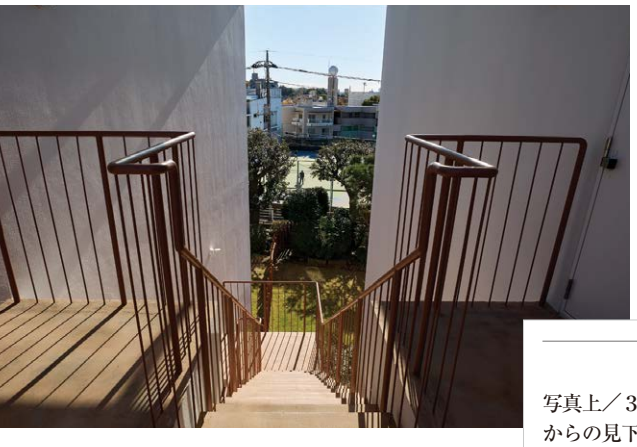
庭園とつながる集合住宅の共用階段。庭園の柵はバルコニーとデザインを統一し、住戸と庭園の一体感を高めている。

素材から建築を組み立てていく設計手法は＋GARDENチームの個性。

プロジェクトごとにチームの個性が表れる

こうした設計手法について萬玉さんは、「もっと、集合住宅のあり方を再検討するようなテーマ設定もあったはずですが、長堀さんたちは違いました。テニスコートや庭園、周辺環境といった既存の要素に新しい要素をフィットさせていく。どこか、リノベーション的な手法を感じました」と言う。続けて西田さんも「長堀さん・河野さん・榎本さんは、屋敷庭やテニスクラブというコンテクストからパッチワーク状に物事を組み立てる能力にすぐれていますよね。周辺との関係もそうですが、それが素材のレベルまで徹底されていて、普通の3倍はマテリアルシートがあるんです。僕や萬玉さんにはない設計手法です」と述べる。そう言われて周囲を見渡すと、素材や色彩の計画に驚かされる。たとえば、1階部分は、テニスのクレイコートを意識して赤茶色でまとめたというが、床のカラーコンクリートのほか、ウッドデッキ、ジョリパットの壁、木調の天井パネル、ルーバーなど、多くの素材が違和感なく連続している。アクセントになる外壁タイルや家具に見られる黄色や緑色は、テニスクラブのテーマカラーだとか。素材への考え方に長堀さんたちの個性が表れているようだ。

オンデザインのホームページを見ると、所属する大勢のパートナーと、多様な作品が並ぶ。3人の話を聞いて、多中心の構造、20%ルール、プロジェクト制といった3つの歯車が噛みあって、豊富なクリエイティビティが発揮されていることを知った。西田さんや萬玉さんがパートナーの設計手法を語る様子が、いかにもオンデザインらしいな、と感じた。



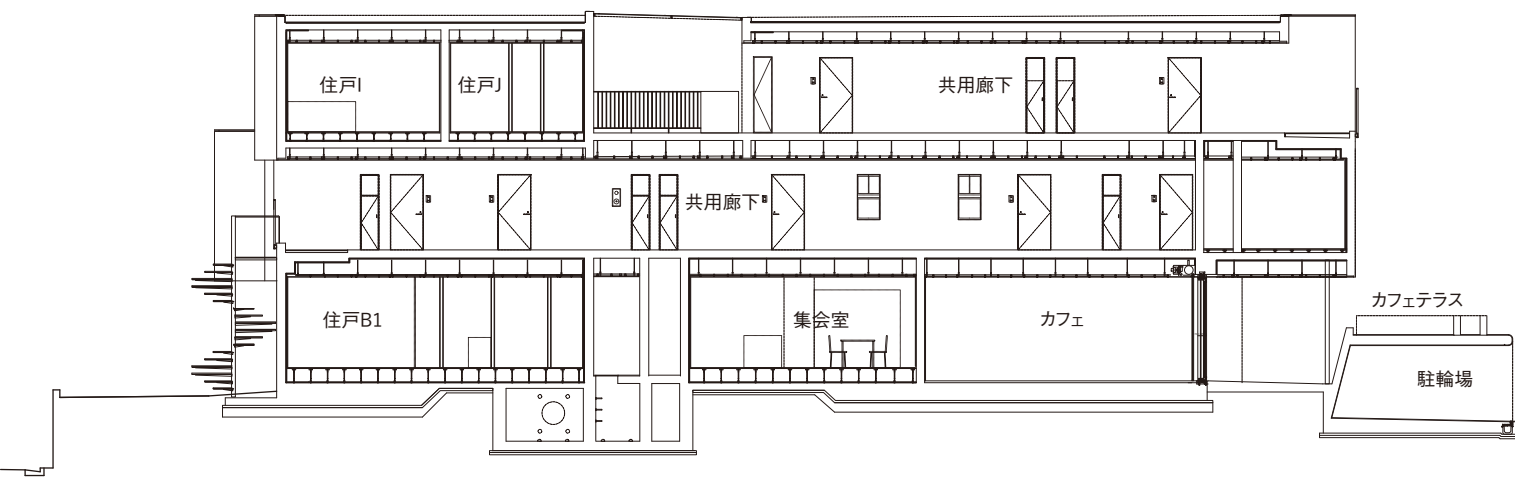


写真上／3階の共用階段からの見下ろし。下方奥にはテニスコートが見える。下／2階の共用廊下。

平面図


N
0 2 4m
1/500
テニスコート
テニスコート
住戸I
住戸L
住戸M
住戸J
住戸K1
住戸K2
3F
住戸C
クラブハウス
更衣室
住戸B1
集会室
住戸A
カフェ
駐輪場
1F
住戸G
住戸B2
住戸B3
住戸B4
住戸H
住戸D
住戸E
住戸F
2F

断面図


0 1 2m
1/200
住戸I
住戸J
共用廊下
共用廊下
住戸B1
集会室
カフェ
カフェテラス
駐輪場



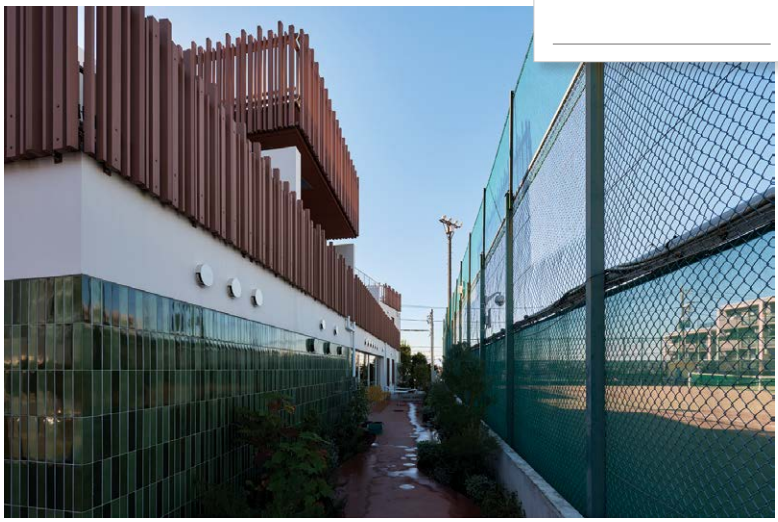
既存の屋敷の塀が残る南側外観。

+GARDEN

建築概要	
所在地	東京都大田区
主要用途	クラブハウス、カフェ、賃貸住宅
設計	オンデザイン
構造設計	ASA
施工	キクシマ
階数	地上3階
敷地面積	1,269.00㎡
建築面積	594.46㎡
延床面積	1,328.41㎡
設計期間	2020年11月〜2021年12月
工事期間	2022年1月〜11月
おもな外部仕上げ	
屋根	塗膜防水
壁	塗り壁
開口部	鋼製建具、木サッシ、複合サッシ
外構	既存利用、通路部分塗り床
おもな内部仕上げ	
クラブハウス	
床	タイル、塩ビシート
壁	塗り壁、AEP塗装
天井	AEP塗装
カフェ	
床	塗り床、タイル
壁	塗り壁、AEP塗装
天井	不燃合板、AEP塗装
賃貸住宅（共用部）	
床	複合フローリング
壁	ビニルクロス
天井	ビニルクロス

ondesign
オンデザイン

おんでざいん／2004年に西田司により設立。横浜に本社を置きつつ各地にも支部を広げ、建築設計からまちづくりまで幅広い活動を行う。オンデザインのおもな作品＝「ヨコハマアパートメント」(09)、「コーポラティブガーデン」(15)、「まちのような国際学生寮」(19)。



左にクラブハウス、右にテニスコート。クラブハウスの外壁仕上げは緑色のタイル貼り。



クラブハウス内観。通路を挟んで奥にテニスコートが広がる。



更衣室への通路。スポーツへと向かう高揚感を演出する照明。



映画監督も写真家も設計者

取材・文／贄川 雪　写真／桑田瑞穂

Profile



井上 岳

Inoue Gaku

いのうえ・がく／1989年山梨県生まれ。2017年慶應義塾大学大学院博士後期課程単位取得退学。14年石上純也建築設計事務所。21年GROUP共同主宰。博士（工学）。



棗田久美子

Natsumeda Kumiko

なつめだ・くみこ／1988年広島県生まれ。2013年慶應義塾大学大学院修士課程修了。14年オンデザイン。21年GROUP共同主宰。21年相模女子大学専任講師。



赤塚 健

Akatsuka Ken

あかつか・けん／1989年千葉県生まれ。2014年慶應義塾大学大学院修士課程修了。21年GROUP共同主宰。



清原 惟

Kiyohara Yui

きよはら・ゆい／1992年東京都生まれ。2017年東京藝術大学映像研究科映画専攻修士課程修了。



三野 新

Mino Arata

みの・あらた／1987年福岡県生まれ。2011年早稲田大学文学部演劇映像コース演劇系卒業。17年東京藝術大学美術研究科博士後期課程修了。博士（美術）。

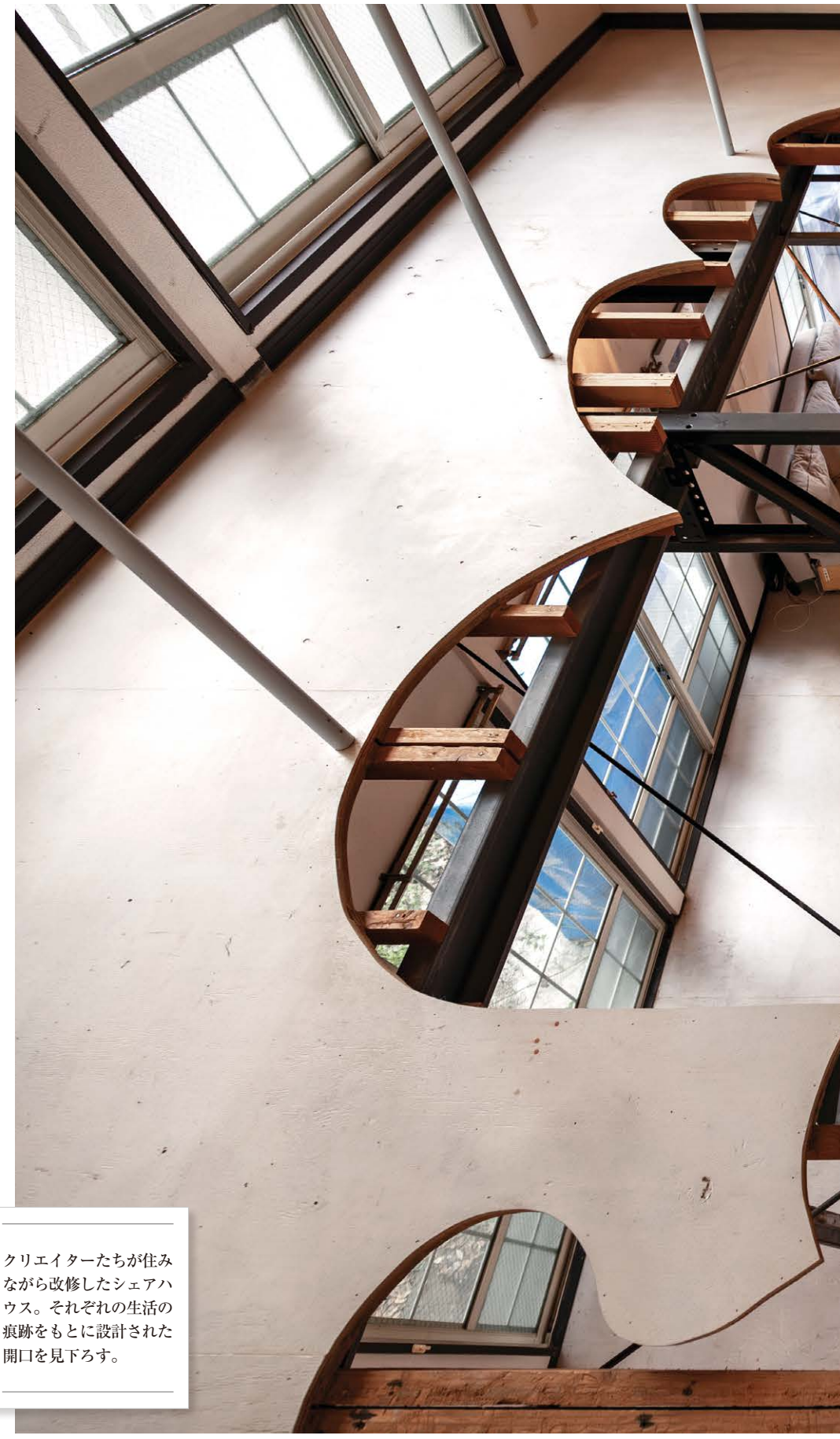
作品

海老名芸術高速

Ebina Art Freeway

設計

GROUP＋清原 惟＋三野 新



クリエイターたちが住みながら改修したシェアハウス。それぞれの生活の痕跡をもとに設計された開口を見下ろす。

井上岳さん、棗田（なつめだ）久美子さん、赤塚健さんらが共同主宰する建築コレクティブ・GROUP。プロジェクトごとにそのメンバーを変えながら、さまざまな分野のクリエイターをも巻き込みつつ設計を進めていく。いったいどこまでがGROUPで、どこからがGROUPでないのか。アメーバのように柔軟なこのコレクティブにおける、組織としての考え方や創作のプロセスについて、中心人物のひとりである井上さんに話を聞いた。

かつての米軍兵士の住まい

「海老名芸術高速」は、神奈川県中央部に位置する海老名市の郊外に立つ、クリエイター向けのシェアハウスである。エメラルドグリーンのカラーリングが目を引く家型の外観で、道路側には畑と広々としたアプローチ、背後には雑木林と住宅街が広がる。手前の2棟の外壁には、一面に大きなガラスの開口が設けられ、内側から不思議な形にくり抜かれた合板が張られている。

もともとこの建物は、ハウスメーカーによって1990年頃に建てられた長屋形式の7棟のプレファブ住宅で、近隣にある米軍基地の兵士とその家族に貸し出されていた。しかし、基地内での寮の新設によって、一部が空き家になっていたという。そんな物件の改修提案を依頼されたのが、建築コレクティブ・GROUPの主宰者のひとり、井上岳さんだった。

映画監督や写真家たちと
ともに暮らしながら、
その生活の痕跡を手がかりに、
改修設計を進めていった。







写真上／A棟西側の壁開口。下／共用アトリエ棟のエントランス部分には蛸足のようなスロープを新設した。

暮らしの痕跡をコンテクストに

井上さんが相談を受けた2020年は、まさに新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた時期だ。「緊急事態宣言の発令で、僕たちだけでなく、友人のアーティストたちも仕事が延期や中止になり、時間を持て余していたんです。そんな状況もあり、彼らと協働すれば何かおもしろいことができるんじゃないかと思いました」

そこで井上さんは、GROUP（当時は井上さん、稟田久美子さん、赤塚健さんによるBORD）だけで設計するのではなく、映画監督の清原惟さんと劇作家・写真家の三野新さんに声をかけ、最初の敷地見学からプロジェクトに参加してもらうことにした。その理由は「かつての住まい手たちがここにいたことを、コンテクストとして設計に反映させたかったから」。「量産型のハウスメーカーの住宅は『判で押したようだ』と否定的にとらえられがちです。それに対する反発みたいなものもあって、居住した人間の物語という、ここにしかないものを扱うべきだと思いました」

しかしそこでなぜ、建築とは異なるフィールドで活躍するふたりに、コラボレーションではなく同じ設計者として参加を依頼したのか。井上さんからは「映画監督や劇作家、写真家は、3次元の物語を、映像や脚本、写真といった2次元の表現に変えることができる職能ですよね。それは僕らがやって



西側からの夕景。7つの家型が連なるプレファブ住宅の改修。

いる空間を図面に変換する仕事とも、どこか通じるものがあるように感じました」と答えが返ってきた。この発想自体にも、GROUPがもつ独特の感覚がよく表れている。

そして3人は、清原さん、三野さんに加え、新たに音楽家や役者らを設計協力者として雇って増員し、総勢9名による現地での住み込み調査を開始する。約1カ月間の共同生活のなかで、庭に残置されたバーベキューセット、棟ごとに異なる壁紙、ゴミ捨て場の覚書など、建物に残る微かな「暮らしの痕跡」をみんなで採集し、写真や映像に記録していった。また周囲の植物、部屋に差し込む光、炊事やおこぼれにあずかりにきた野良猫の様子など、自分たちの日常も併せて記録していく。こうして現場に身を投じ、住み手と設計者という立場、あるいは過去の暮らしと今の暮らしを行き来しながら、彼らは改修の構想を膨らませていった。

フラットな立場で場所を構築する

少額予算のため、改修箇所とその内容は厳選された。まず全体としては、7棟のうちすでに界壁が取り払われていた最南の2棟を共用アトリエ棟と改め、残りは住棟（4棟がシェアハウス、1棟は改修前からの住人の住居のまま）の計6棟に再構成した。

続いて個別の改修箇所をみると、それらは設計プロセスの性質から2種に分けられる。ひとつは、建物や周辺環

境といった、既存の物理的な条件に呼応してつくられた場所だ。具体的にいえば、各住棟に付随する屋外の作業場床と、共用アトリエ棟に設置したスロープがそれにあたる。

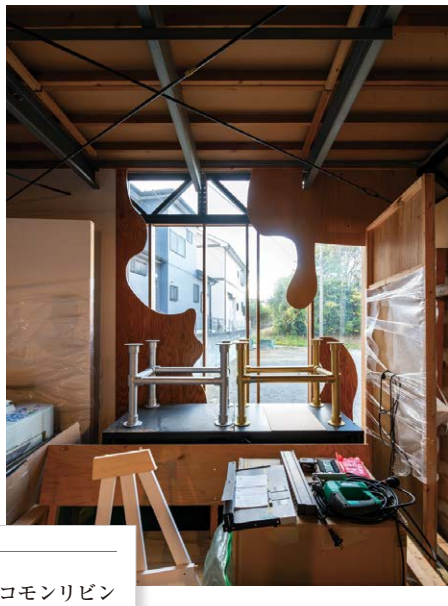
もうひとつは、先述の「暮らしの痕跡」を形の手がかりにして改修した場所である。冒頭で触れた手前（西側）2棟の開口部、共用アトリエ棟1階の基礎が露わになった床や、2階床をくり抜いて設けた吹抜け、各住棟の作業場出入口の扉がそれにあたる。それらに共通する直線と曲線が交じった吹き出しのような形状は、その場所と近辺の記録写真をコラージュしながら、ひとつずつデザインされた。

強調しておくべきなのは、そのコラージュは設計されたものだということだ。すべてが審美的、あるいは感性でデザインされたわけではなく、通風や採光、プライバシーの確保といった実生活における必要性や、集まって腰掛けられる、作業台として活用できるなど、住み手の創作活動の一助になりうるような機能性を考慮しながら、その形は導かれている。

また、アーティストたちがコラージュデザインを担当し、GROUPが空間や機能面を設計するといった分業体制がしかれたわけでもない。「作業場の使い勝手などは、機材や工具を扱い慣れているみんなから教えてもらうことばかりでした。僕たちが率先したのは、最終的に決まった形を図面にしたこと

「設計」を建築家が独占するのではなく、
さまざまな出自の人たちと共有する。





写真左上／コモンリビング。右上／内側から壁開口を見る。下／1・2階の床に不定形な開口をあけ吹抜けを設けた。





アトリエ棟2階ギャラリー。床開口から1階コモンリビングが見える。

ぐらいです」。各自が有する技能や経験、専門性や身体性みたいなものを通しアイデアをもち寄り、全員がフラットで対等な立場で建築プロジェクトに向きあう。GROUPはその行為や態度を「設計」と呼んでいるようにみえる。

GROUPはグループではない?

こうした姿勢はどのように培われたのか。まず、そもそもの「GROUPというグループ」の成り立ちとは。井上さんは「僕自身は、独立してもひとりで事務所を立ち上げてやっていこうとはまったく考えませんでした。成り行きではなく、最初から意識的に、複数名での共同設計で個人名を大きく出さないことにしています。そういう構えをつくるだけでも、今までとは違う建築ができると思いました」と言う。

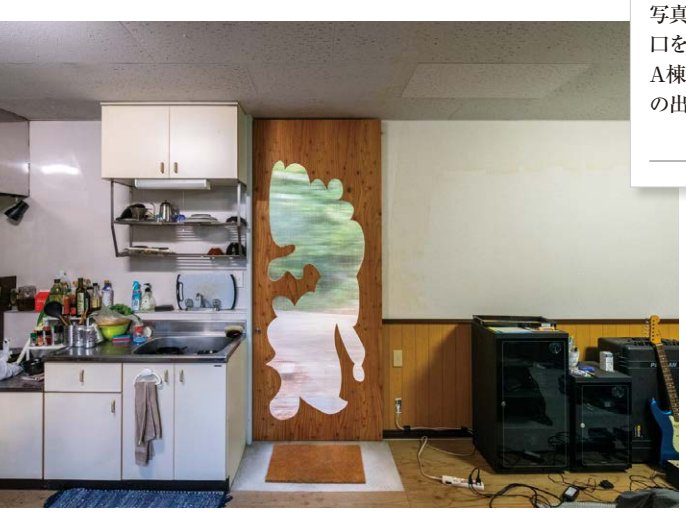
また、そのGROUPという枠組みさえも超えた設計チームづくりを志向するのはなぜか。それに対しては「設計って、本来は建築教育を受けた人だけのものではないはず。他業種のデザイナー、美術家、パフォーマーなど、あらゆる出自の人たちと同じ目線で一緒につくっていくほうが、圧倒的に議論は多角的で豊かになるし、結果として建築の可能性も広がると思うんです。僕たちは、そういう可能性みたいなものをすくい上げられるようになりたいかな」と答えが返ってきた。つまり、GROUPは「グループ」というより、建築プロジェクトにおいて異なる専門性を交錯させながら協働するための「場」であろうとしているのだ。確固たる強い個性をもったひとりの建築家が率いる「アトリエ集団」とも、建築教育を受けたメンバーの相互作用によって設計を展開する「ユニット派」とも異なる、オルタナティブなあり方として、誰もが建築設計に参加できるために開かれた「場」であることを標榜し、専門性をそのために発揮しようとしている。

活動テーマとして掲げている「手入れ」というキーワードも、それをよく表している。

井上さんいわく「『手入れ』とは、日々変わっていくような情報や状況に対して向きあいつづけていく、姿勢や態度」のこと。リノベーションやメンテナンスという言葉が帯びる、小難しくて、なんだかハードルの高そうな語感も、「手入れ」という言葉になった途端にそれは和らいで、あらゆる人たちにとって身近な手段へとその印象を大きく変える。こうした言語翻訳とコミュニケーションさえ、GROUPはおそらく「設計」の一環ととらえているのだろう。

建築や設計の専門性がはらむ垣根を意識的に取り払い、凝り固まった設計チームの集い方を自ら解体していく。こうした姿勢に、GROUPの問題意識と、そのあり方の本質があるように思われる。





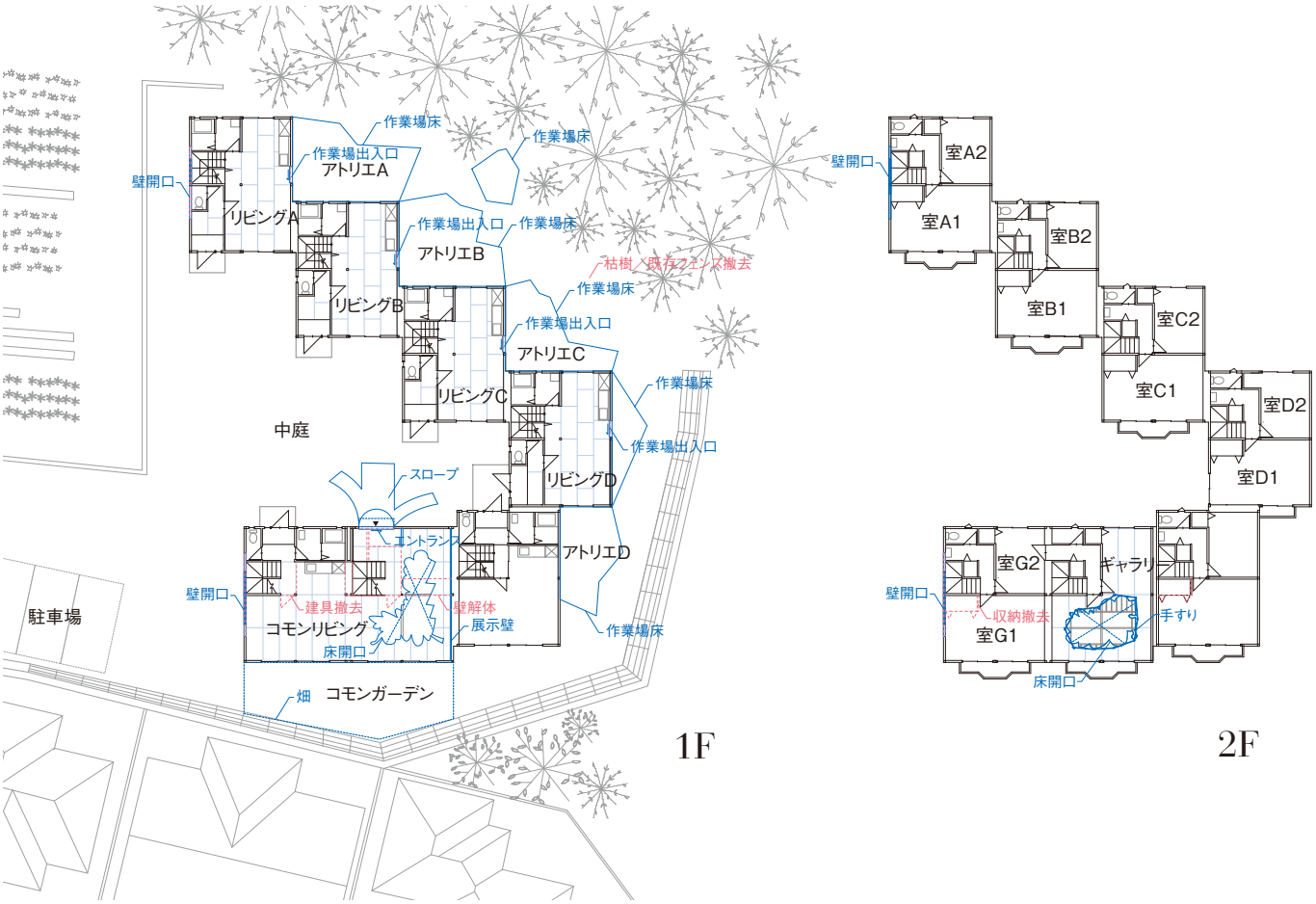
写真上／A棟2階の壁開口を内側から見る。下／A棟1階。アトリエAへの出入口にも開口が。

平面図

N

0 2 4m

1/400

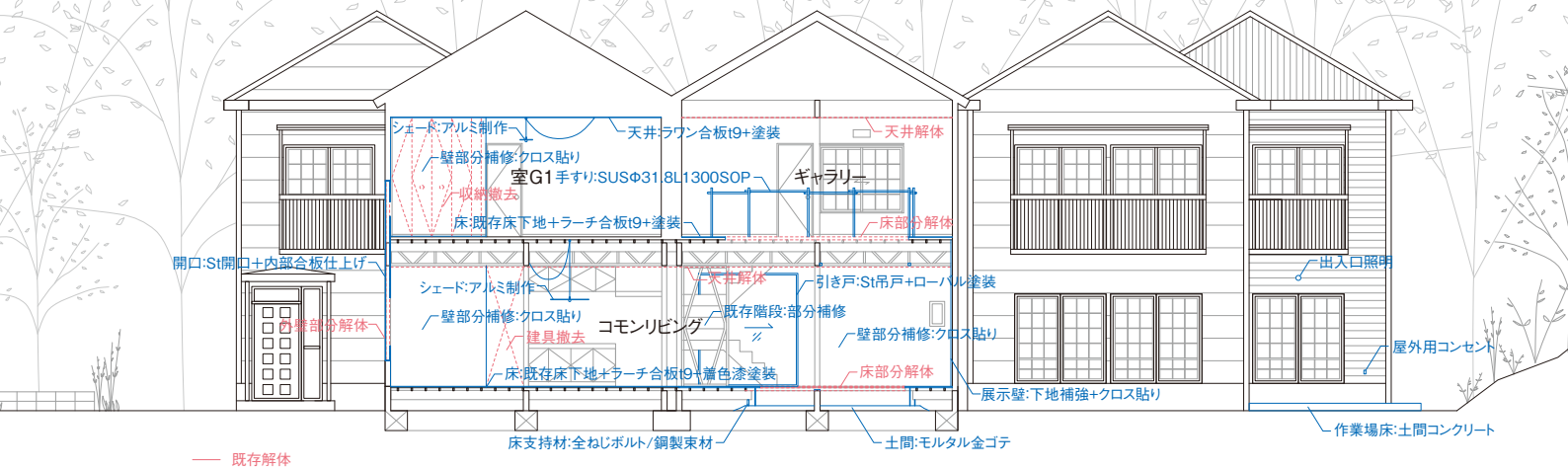


既存解体
補修・新規設置

断面図

0 1 2m

1/150



既存解体
補修・新規設置



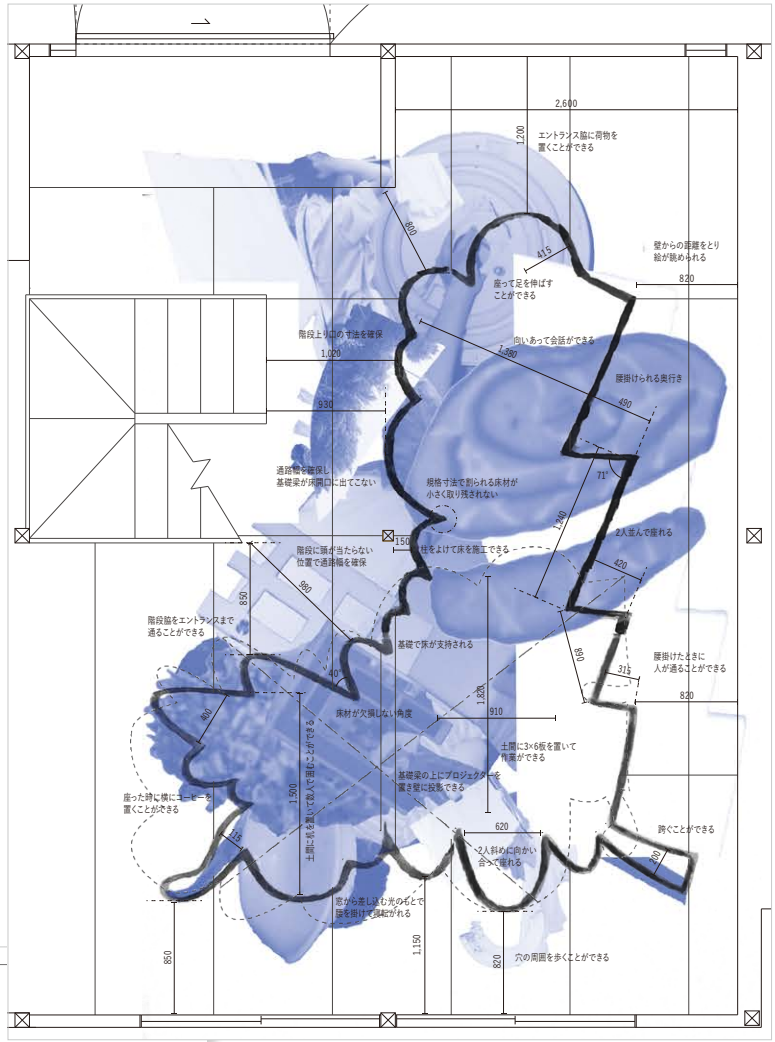
外観。A棟西側の窓開口を見上げる。

海老名芸術高速

建築概要	
所在地	神奈川県海老名市
主要用途	長屋
設計	GROUP、清原惟、三野新
施工	月造
階数	地上2階
敷地面積	1,118.15㎡
建築面積	289.89㎡
延床面積	579.79㎡
設計期間	2020年4月〜11月
工事期間	2020年12月〜2021年2月
おもな外部仕上げ	
引き戸	スチールハンガードア
	ローバル塗装
開口部	スチールサッシ（強化ガラス、
	スチールFB枠塗装）
外構	土間コンクリート
おもな内部仕上げ	
コモンリビング	
床	ラーチ合板 着色漆仕上げ
壁	ビニルクロス貼り
	（一部、展示壁仕様）
天井	ラワン合板 クリア塗装

GROUP

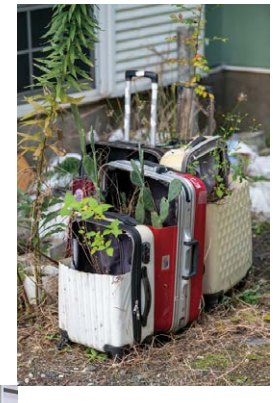
ぐるーぷ／井上岳、棗田久美子、赤塚健、齋藤直紀、中井由梨らによるコレクティブ。プロジェクトごとにそのメンバーを変えながら、さまざまな分野のクリエイターも巻き込みつつ、建築や展覧会などのプロジェクトを行う。GROUPのおもな作品=「新宿ホワイトハウスの庭」(2021)、建築展「手入れ／Repair」(21)、「島をつくる | Planning Another Island」(24)。



コモンリビングの床開口。住人たちの生活の痕跡の記録をコラージュ（青）し、形に落とし込んだ。

写真３点／それぞれの軒先にはクリエイターである住人たちにまつわるアート作品がさりげなく置かれている。







3



異なる職能の結集と放浪

取材・文／市川幹朗　写真／傍島利浩

Profile



稲垣淳哉

Inagaki Junya

いながき・じゅんや／1980年愛知県生まれ。2006年早稲田大学大学院修士課程修了。09年Eureka共同主宰。現在、早稲田大学芸術学校准教授。



佐野哲史

Sano Satoshi

さの・さとし／1980年埼玉県生まれ。2006年早稲田大学大学院修士課程修了。09年Eureka共同主宰。現在、慶應義塾大学理工学部専任講師。



永井拓生

Nagai Takuo

ながい・たくお／1980年山口県生まれ。2009年早稲田大学大学院博士課程単位取得退学。同年Eurekaパートナー。現在、滋賀県立大学環境科学部講師。



堀 英祐

Hori Eisuke

ほり・えいすけ／1980年佐賀県生まれ。2007年早稲田大学大学院修士課程修了。09年Eurekaパートナー。現在、近畿大学産業理工学部准教授。



早田大高

Hayata Hirotaka

はやた・ひろたか／1987年埼玉県生まれ。2015年早稲田大学大学院博士後期課程単位取得退学。18年早田大高設計事務所設立。21年空間工房花組。

作品 Blue Box Office

設計 稲垣淳哉＋佐野哲史＋永井拓生＋堀 英祐／Eureka＋早田大高設計事務所



住宅地に隣接する会計事務所のエントランスにキッチンがある。地域とのつながりと温度を感じることのできるオフィスを目指したものだ。

稲垣淳哉さん、佐野哲史さん、永井拓生さん、堀英祐さんの4人からなるEureka（エウレカ）。ともに早稲田大学で建築を学んだ学友であり、4人それぞれが計画・意匠・構造・環境という異なる専門をもち、最小の組織設計ともいえるユニットである。最近では外部の設計事務所との協働にも積極的で、そのコラボレーションの幅を広げている。15年以上にわたり強くかつゆるくつながる4人の関係性は、どのような建築を生み出し、今後どのように変化していくのだろうか。

取材先が遠方でない限り、事前に周辺の様子を見て歩く。目当ての建物も、前を歩いて通行人として眺めてみるのだが、「Blue Box Office」の前を通ったとき、一瞬、花か観葉植物を扱うお店なのかと思った。それほどエントランスの大きなガラスの向こうは緑があふれている印象で、おまけに水場（キッチン）も入ってすぐのところにある感じ。ちょうど下りてきた人影も、植物の手入れのために現れたと考えても違和感はなかった。ところが、それこそがクライアントで会計事務所を営む青山裕之さんの、そして設計したEureka・佐野哲史さんのねらいだった。

学生時代からのつながり

Blue Box Officeに触れる前に、まずEurekaについてみておきたい。

Eurekaは稲垣淳哉、佐野哲史、永井拓生、堀英祐の4人によるユニットである。活動開始は2009年頃、らしい。この「頃」が問題だ。現在、ホームページを見ると、確かに「一級建築士事務所Eureka」となっているし、埼玉県で建築士事務所登録もしている。ただ、ここを4人が活動拠点としているわけではない。本人たちによるとEurekaというのは活動や発表をするときの名称で、基本的には4人それぞれ個別に仕事を続けている。実際、4人とも大学などで教えていて、堀さんは福岡の、永井さんは滋賀の研究室に常駐。このスタイルは当初からそれほど変わっておらず、つまり4人が机を並べて事務所が始まったわけではない。そのために、いわゆる創業記念日的な日にちが強く意識されず、「その頃」という表現になるのだろう。

4人の出会いは早稲田大学の学部生時代。学年は佐野さん、永井さんがひとつ上だが、1、2年生の頃、つまり専門課程に進む前から周囲の仲間たちとともに一緒にコンペをやったり、建築を見に行ったり、勉強会をするような関係だったという。専門課程は、永井さんが構造へ、堀さんが環境へ進み、自然と現在のEurekaの特徴である稲垣さんが計画、佐野さんが意匠、永井さんが構造、堀さんが環境という役割分担が醸成されていく。

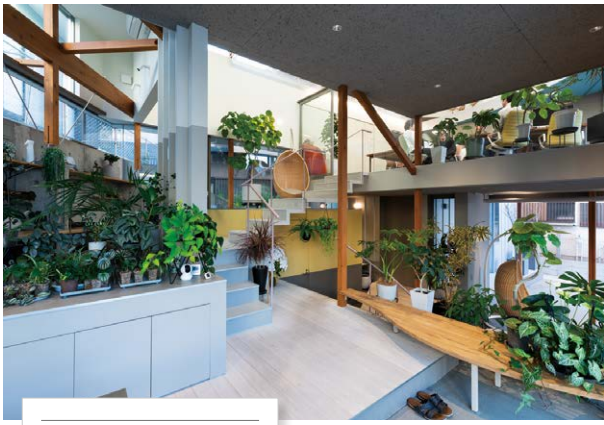
ただし、この「専門性の異なる4人のチーム」というのは「社会に対して看板を掲げるようなもの」（稲垣さん）で、それが目的になっているわけではないという。「異分野協働をすることで、総和がより大きくなることを期待されますが、それを証明するためだけにやっているわけではない」（同）とも。要は、この4人が集まったチームだからこその解に固執しているわけではない、ということだろう。これまでも「Around the Corner Grain」（15）でMARU。Architectureと協働しているし、このBlue Box Officeでも、後輩である早田大高設計事務所が設計過程でコラボレーションしている。「最初はお手伝いくらいの感じだろうと思っていたんですが、始まってみたらそんなレベルではなかった」とは早田さんの言で、立場的にはEurekaのメンバーとほぼ同等。青山さんとの打ち合わせにもつねに同席していたそうだ。

計画、意匠、構造、環境。
専門性の異なる4人のチームがつくる
濃密な建築。

人の気配を感じるオフィス

ということを踏まえたうえで、あらためてBlue Box Officeを見てみよう。

敷地はJR浦和駅から歩いて10分もかからない好立地。幹線道路から少し入ったところにある閑静な住宅地で、



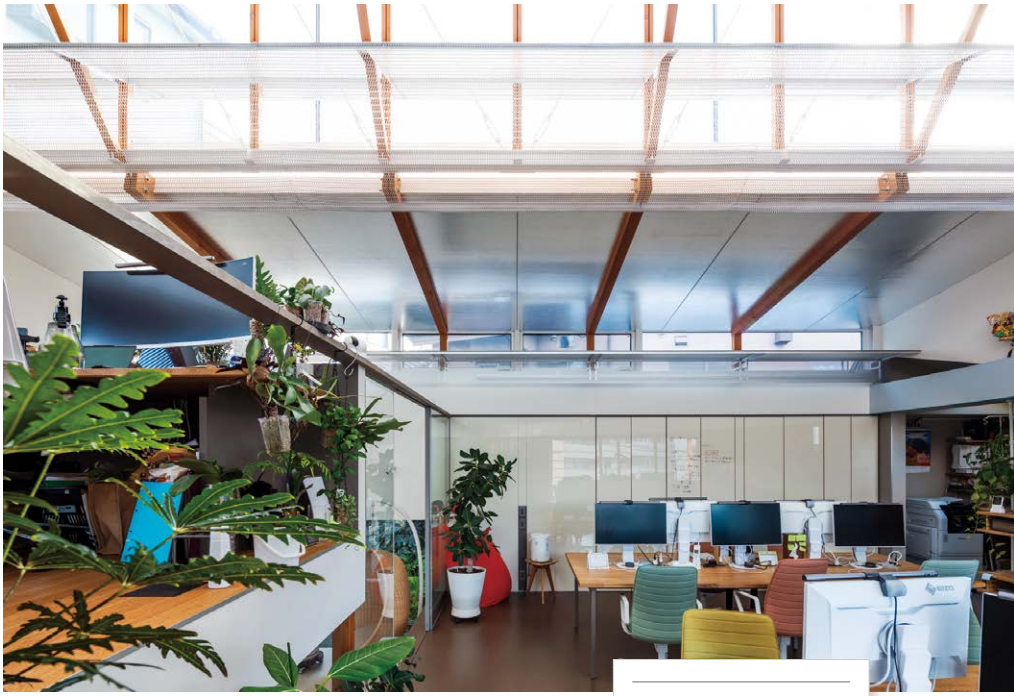
1階エントランスホール。左にキッチン、右にミーティングスペース。

1階ホワイエからエントランスホールを見る。スキップフロアを上ると2階の事務室に至る。

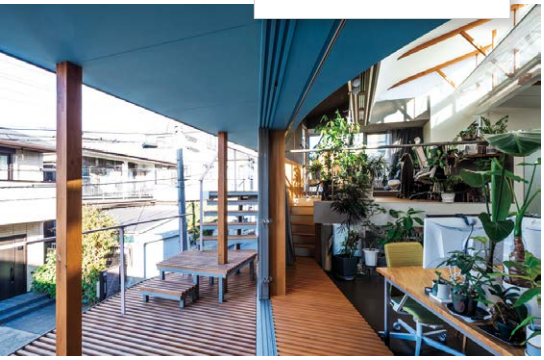




中２階のライブラリーから２階事務室を見る。ハイサイドライトからリフレクターを介してやわらかな光が下階まで届く。



写真上／事務室１内観。天井には遮熱と反射のための金属シートが貼られている。下／事務室１から一段上がった事務室２（中央奥）を見る。



テラス３から事務室を見る。外階段を上がるとテラス２を経て事務室２へと戻る回遊性のある動線計画。



周囲には新旧の戸建て住宅が立ち並ぶ。北側が道路で、西に向かって少し傾斜しており、東側隣家の高い擁壁の下にある敷地はどうしても暗い印象だったという。そのためオフィス空間をいかに明るくするかは必然のテーマとなる。さらに青山さんの希望として、「閉じた箱にはしたくない」というものがあった。住居兼用ではない純然たる「オフィスビル」を住宅街に建てるにあたっては良識ある作法でもあるが、そこで佐野さんが提案したのが「エントランスのキッチン」と「緑」。ガラス越しのキッチンは、そこを使っているだけで人がいることを外にうかがわせ、エントランスや上部テラスに置かれた植物は手入れをする人の様子とともに周囲に潤いをもたらす。青山さんはもともと植物好きだったわけではなく、この建物で過ごすうちに少しずつ増やして世話をするようになったそうだが、今ではすっかりくわしくなって、季節や時間によって鉢の場所を変え、植物たちにとっての最適な環境を模索する。訪れたのが寒い時期だったこともあって、テラスの植物たちは室内に取り込まれていたが、佐野さんの目論見どおり、季節によってテラスで鉢の手入れをする青山さんの姿を見ることができるのだろう。

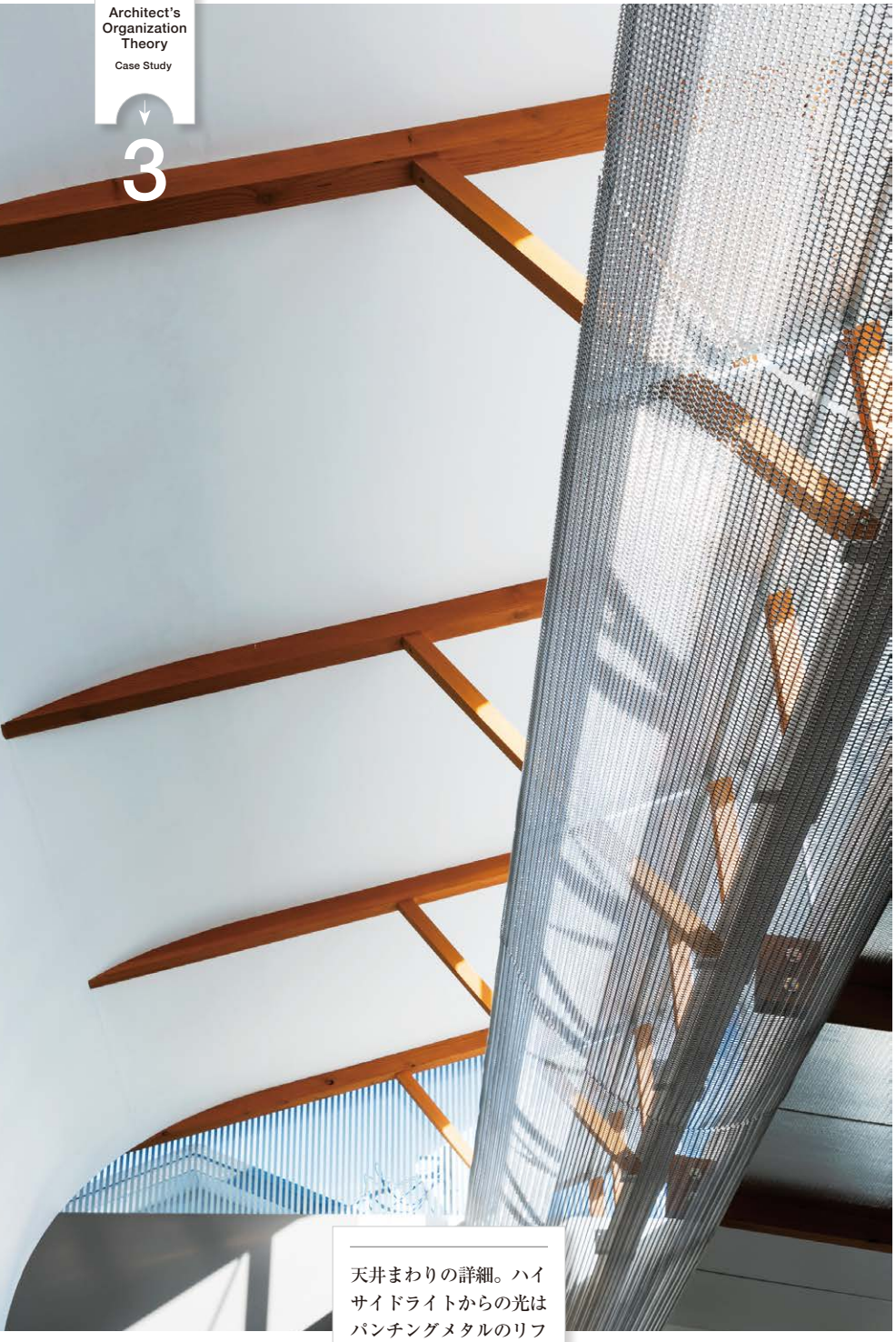
自然光を有効に取り込む仕掛け

Blue Box Officeの全体の構成は、敷地の高低差を生かしたスキップフロアになっている。低いほうの西側は思い切って開き、ピロティとして地域に開放。ピロティとフラットにつながる最下層のミーティングスペースから数えると青山さんの執務場となる最上層まで6層の空間がつながる。そして階段のパンチングメタルなども手伝って、上部南側のハイサイドライトから取り込んだ光を建物中に行き渡らせる。南側からの直射は強すぎるということで、2カ所のハイサイドライトにはパンチングメタルを利用したリフレクターを設置。リフレクターに反射した光は上部ではアールの漆喰天井で、下部では天井に貼られた金属シートで再び反射して室内に広がる。上部のハイサイドライトにはメタルメッシュも加えて、光を拡散させ、執務スペースのどこにいても、自然光によって300lx（一般的な事務作業に必要な照度といわれる）を確保できるようシミュレーションもなされている。もちろん十分な日

たくさんの緑と
やわらかな光に満たされた、
外とのつながりを感じるオフィス。

射がある日ばかりではないので、補助的に照明は用意されているが、天気のよい日には「夕方になって、なんとなく暗いかなと思ったら照明を点け忘れていた」(青山さん)というほど。使用状況を見ながら、ライティングレールに照明を追加したりスタンド照明を設置したりと調整は続くが、まずは自然光で部屋全体の照度を確保しようという試みの効果は実証されているといえそうだ。

この特徴的な上部のハイサイドライトを実現させているのが、長手方向に入れられた鉄骨トラス。執務空間を無柱のワンルームにするため鉄骨トラスを使った屋根架構についてはさまざまな検討が重ねられていたが、長手方向に入れるという永井さんの提案がブレイクスルーになる。トラスは日射の進入を妨げないよう、斜材は鋼棒、縦材はT型鋼のウェブを木材で補強して、できる限り細く構成されている。



天井まわりの詳細。ハイサイドライトからの光はパンチングメタルのリフレクターに反射し、アールの天井を伝い室内に広がる。

つながり方の新しいかたち

今回協働した早田さんの事務所はBlue Box Officeにも近く、早田さんと青山さんは顔なじみでもあった。つまり地域のことをよく知っている早田さんが参加することで、よりよいものになるという判断。そこに「メンバー外だから」というハードルはない。「Eurekaを始めた初期の頃から、自分たちだけでやりたいという欲求は強くありませんでした。むしろ知見が多い人と一緒にやりたかった。このBlue Box Officeでも誰と一緒にやれば、さらにうまくいくかという視点で考えて早田さんにお願いしました」(佐野さん)

ちなみに前述の光環境のシミュレーションでも具体的な作業には堀さん以外の人間がかかわっている。「初期設定の判断を堀がしていれば、作業自体は堀がやらなくても大丈夫」(稲垣さん)という作業分担の関係は、単なる外部委託とは確実に異なる。リフレクターの色決めなど、最終的には1／30程度の模型で検討したというのも、そうした密な関係のなかで可能になることだろう。

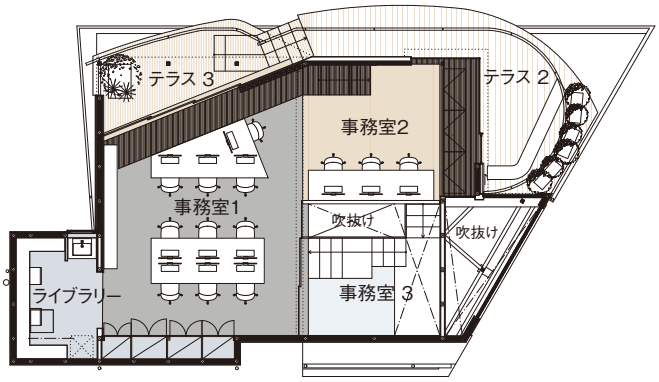
Eurekaとして動きはじめてから、すでに15年以上。メンバー4人の結びつきが強いのかゆるいのか、はたからはよくわからない。学生時代以来の付き合いで阿吽の呼吸でわかりあえているようで、それぞれ別の方向を向いているようにもみえる。言葉は悪いが、ぼんやりとした集合体。しかしだからこそ、メンバー以外とも柔軟にコラボレーションできる。ただし、必ず誰かと一緒にやることをルール化しているわけでもないから融通無碍。

これまでの歩みについて「呑気に、誠実に、ゆっくり。成果を効率的に求めずにやってきた」(稲垣さん)と語る言葉は、まわりから押し付けられる「チーム」の概念への抵抗のようにも聞こえる。中心性がないようで、ある。新しい協働のあり方なのかもしれない。

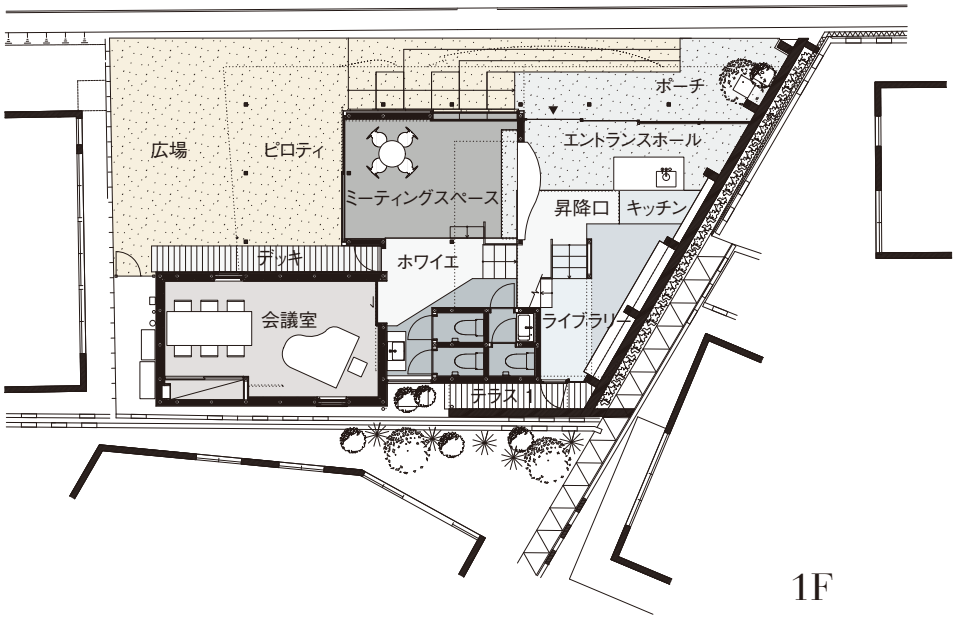
平面図

0 1 2m

1/200



2F

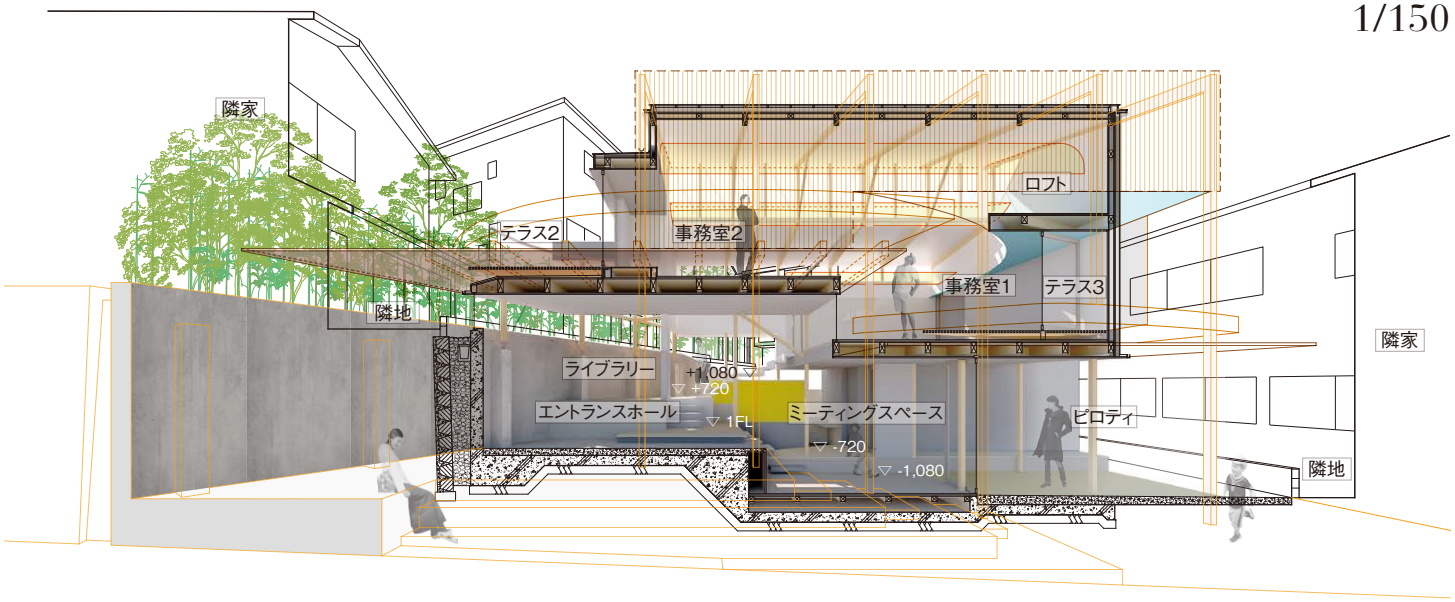


1F

断面図

0 1 2m

1/150





北側外観。

Blue Box Office

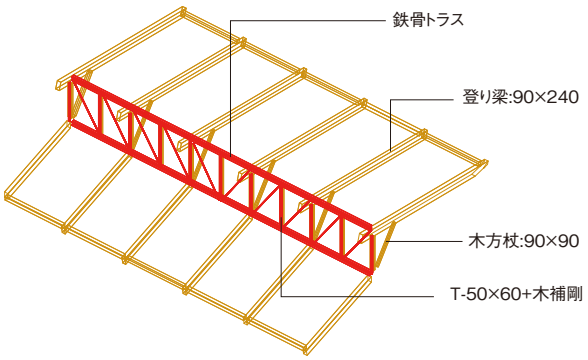
建築概要	
所在地	埼玉県さいたま市
主要用途	事務所
設計	Eureka、早田大高設計事務所
構造	Eureka、Noot Engineer
環境	Eureka、慶應義塾大学理工学部
	システムデザイン工学科
施工	榊住建
階数	地上2階
敷地面積	161.02㎡
建築面積	95.35㎡
延床面積	161.90㎡
設計期間	2021年6月～2022年7月
工事期間	2022年8月～2023年7月
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板葺き、一部FRP防水
外壁	ラワン羽目板張り キシラデコール塗装、
	アクリルリシン吹付け、ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き
開口部	木製建具（製作）、スチール枠はめ殺し窓（製作）、
	アルミサッシ
外構	コンクリート土間 ランデックスコート塗膜、砂利敷き
テラス	木製すのこ キシラデコール塗装
おもな内部仕上げ	
エントランスホール・キッチン	
床	コンクリート土間 ランデックスコート塗膜、
	スギ板フローリング
壁	コンクリート擁壁打放し、PB AEP塗装、
	アクリルリシン吹付け
天井	硬質木毛セメント板 AEP塗装
事務室1	
床	Pタイル敷き
壁	アクリルリシン吹付け、ラワン羽目板張り
	キシラデコール塗装、
	PB AEP塗装、カラーガラス貼り
天井	アルミ遮熱シート貼り、梁現しのうえキシラデコール塗装
リフレクター	アルミパンチングメタル、アルマイトシルバー、
	アルミアングル下地、メタルメッシュ アルミ素地

Eureka
エウレカ

えうれか／2009年に稲垣淳哉と佐野哲史により共同設立。永井拓生と堀英祐をパートナーに加え、建築の計画・意匠デザインから構造・環境エンジニアリングまで、大小さまざまな設計を行う。Eurekaのおもな作品＝「Dragon Court Village」（13）、「Around the Corner Grain」（15）、「NAGI Terrace」（19）。

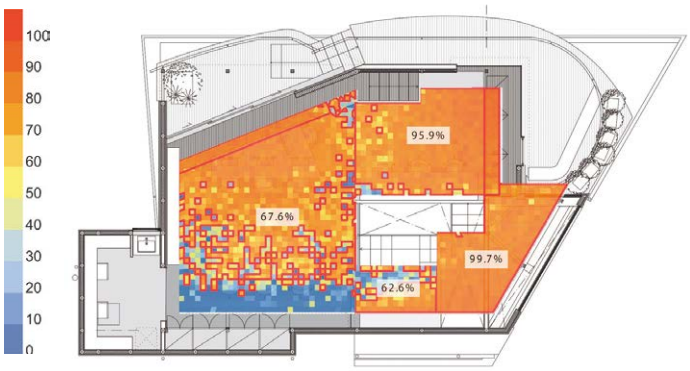
構造

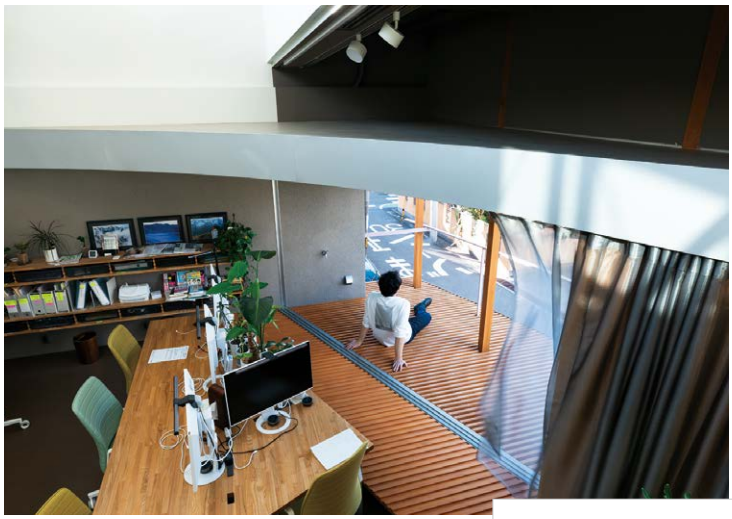
屋根架構システム図。執務空間を無柱としつつ、かつ採光も確保するために、ハイサイドライトを兼ねた鉄骨トラスを東西に架け渡し、そこに木造の梁を組み合わせたハイブリッド構造。



環境

昼光自律性のシミュレーション。北向きの敷地でありながら、南向きのハイサイドライトから光をやわらかく取り入れることで、執務空間に満遍ない照度を確保した。





「Blue Box Office」の動画をご覧いただけます →

事務室２から事務室１とテラス３を見下ろす。



東京の住宅地に立つ夫婦と子どもひとりのための住宅。中央の黒いシリンダーは階段室。

思想を同期させる「ウルトラ会議」

取材・文／植林麻衣　写真／山内紀人

Profile



向山裕二

むかいやま・ゆうじ／1985年広島県生まれ。2008年東京大学工学部建築学科卒業。11年スイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）。12年クリスチャン・ケレツ。13年東京大学大学院工学研究科建築学専攻修了後、渡邉健介建築設計事務所（kwas）。15年ドレル・ゴットメ・タネ・アーキテクツ。18年ウルトラスタジオ設立。

Mukaiyama Yuji



上野有里紗

うえの・ありさ／1986年東京都生まれ。2010年ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ視覚文化論学部卒業。13年AAスクールインターメディエートスクール卒業後、フォスター・アンド・パートナーズ。18年英国王立芸術大学院大学（RCA）建築学専攻修了。19年ウルトラスタジオ参画。

Ueno Alyssa



笹田侑志

ささだ・ゆうし／1987年福岡県生まれ。2011年九州大学芸術工学部環境設計学科卒業。12年スイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）。13年パスカル・フラマー・アーキテクト。14年東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻修了後、青木淳建築計画事務所。20年ウルトラスタジオ参画。

Sasada Yushi

作品

残像の家

After Image

設計

ウルトラスタジオ



スイスで建築を学んだ向山裕二さん・笹田侑志さんと、イギリスで視覚文化論と建築を学んだ上野有里紗さんが東京で合流したウルトラスタジオ。言語化を重視し、議論をつくす設計スタイルである一方で、「象徴性と装飾性」という感性的なテーマを追求しているという。言語化と感性のあいだに3人で見出す着地点が、ウルトラスタジオの建築空間として立ち現れていく。

赤、青、黒、黄が渦を巻き、飛沫を上げる。3人でDIYをしてつくったそのテーブルは、スカリオーラというイタリアの大理石を模した技術を用いたもの。石こうと顔料を混ぜあわせて削り出した天板に、鮮やかな色と模様がダイナミックに躍動する。

このテーブルが置かれているのは、向山裕二さん、上野有里紗さん、笹田侑志さんの3人による設計コレクティブ・ウルトラスタジオのオフィスの一角。オフィスはマンションの一室をリノベーションしたもので、内部空間は機能ごとに4色で分節されている。鮮烈な4色はリートフェルト（レッド&ブルーチェアで知られる建築家）へのオマージュで、これらの色が象徴的に混じりあうのが、擬似大理石仕上げのテーブルだ。またこのテーブルは、3人の設計活動の核をなす「議論」の場でもある。

2人ではなく 4人でもなく 3人で

ユニットであれグループであれ、設計事務所を複数で立ち上げる場合、研究室や同級生という共通項をもつケースが多いが、ウルトラスタジオの3人は、出自も年齢もバラバラ。強いていえば、3人とも海外で建築を学んだ経験があるというのが共通点だ。向山さんと笹田さんは留学先にスイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）を選び、上野さんはロンドン大学ゴールドスミスカレッジの視覚文化論学部から建築を学ぶためにAAスクールに入り直したという経歴をもつ。

そんな3人が邂逅した場所が東京だ。「ロンドンはジェントリフィケーション（再開発による地域の質の向上を指すが、しばしば地価の高騰を招く）が進みすぎていて、おもしろさに欠けていました。対して東京は大きなプロジェクトに若手がかかわるのが難しい一方で、小住宅をはじめ実験的な土壌があると思ったのです。議論の場もあり、総合的に魅力を感じました」と上野さんは語る。世界で建築を学ぶ日本人学生の展覧会で出会った3人は、1960年代のグループ「スーパースタジオ」に代表されるイタリアン・ラディカルズに共感するというバックグラウンドもあり、意気投合ののち「ウルトラスタジオ」を結成する。

もともとETHZで出会って気心が知れていた向山さんと笹田さんは、いずれ一緒に事務所を構えようと話していたという。「ただ、やるのなら〝3人で〟と決めていて、ひとりで事務所を立ち上げるのは最終手段」というのがユニークだ。2人でも4人でもなく、3人で。偶数人だと意見が同票数で割れて平行線をたどることもあるが、3人なら着地点を見つけやすい、というのがその理由だ。事務所の形態としては、3人の対等な関係をつくりやすいという理由で、株式会社として法人化。3人の共同主宰という運営で、向山さんが代表取締役に就いている。

象徴性と装飾性

3人による設計プロセスでは、それぞれの得意分野を生かしたゆるやかな役割分担がある。上野さんは企画、笹田さんが形態、向山さんは理論。そして誰がイニシアチブをとるかは、設計のフェーズやプロジェクトによって異なる。「効率は悪いかもしれませんが……」と前置きをしたうえで、3人で可能な限りすべてのプロジェクトのミーティングに出席し、話しつづけたり聞きつづけたりすることを大切にしているそうだ。組織としても、スタッフが複数のプロジェクトに並行して携わる采配を心がけているという。

> それぞれ得意分野や役割はありつつも、
> 着地点を見つけるまで議論をつくすのが
> ウルトラスタジオ3人のスタイル。

3人で組んでいる以上、都度、議論のうえでコンセンサスをとらなければならないので、欠かせないのが言語化作業だ。「はじめから理路整然とストーリーを組み立てられるわけではないし、演繹的でもない。合理性・機能性と、無意識かつ直感的な感性の両方から始まって、収斂できる着地点を3人で見つける」と語るように、週に一度は3人でプロジェクトや思索を巡らせていることについて話しあい、月に一回、スタッフも交えた「ウルトラ会議」を催している。そしてここ数年の議論の軸となっているのが「象徴性と装飾性」だ。理屈は通っているけれども、それだけでは説明しきれない多様性をはらむものづくりがしたい。話しあいのなかから生まれたものに、一貫した説明を与えたい。それを可能にするのがこれらふたつのキーワードで、「残像の家」をはじめとする実作にも、通底するテーマとなっている。

議論が実空間化する「残像の家」

東京・杉並区の住宅街にたたずむ「残像の家」は、北側が路地のような私道、東側が公道に接し、西と南が隣戸に囲まれた26坪強の敷地だ。敷地にかかる諸制限や要望からおのずとボリュームが決まり、建坪は約12坪。無地サイディングで仕上げた外観は、開口を絞った寡黙な表情だが、中に入ると一転、光と色と形態が織りなす豊かな渦に呑み込まれる。



ダイニングから居間方向を見る。水色のキッチン、赤い壁、銀色のシリンダー（PS）など豊かな色使いが際立つ。



ダイニングの北側にはキッチンから連続した正三角形のテラスが突き出している。

4

黒いシリンダーのまわりで、
赤、青、水色など、
さまざまな色彩のエレメントが空間を彩る。
そうしたイメージの断片が、
住人たちの記憶として蓄積していく。



2階ワークスペース。黒いシリンダーと干渉しないようデスクの一部が円弧状に欠き込まれている。

1階はワンルーム状のLDKだが、プランの中心には黒いシリンダーがミステリアスに鎮座する。これは螺旋階段を内包する階段室であり、上下階を移動する装置としての機能をもちながら、視界の抜けをさえぎる邪魔者のような存在だ。そして黒いシリンダーの周囲には、水色のキッチン、青い柱や鮮やかな赤の染色合板によるボックスといった、豊かな色彩が横溢する。2階は寝室群やワークスペース、洗面所・浴室からなり、こちらも床の黄色、カウンターの水色、扉の赤や青など、色が印象的に使われている。

小住宅の設計セオリーのひとつとして、白やベージュといった広さを感じさせる膨張色でまとめあげる手法があるが、「残像の家」ではそうした方法をとらず、ラディカルな色使いにより、小さな居場所が緩急つけてちりばめられている。色使いのみならず、「反射」を効果的に取り入れているのも特徴のひとつ。私道に面した窓の上には、銀色の水平シリンダーを設け、光と庭の風景を拡散させる。青い柱には鏡を張り、キッチンで作業しながら居間の子どもの様子をうかがえる工夫も施した。こうした反射素材により、情景や空間を想像的に補完できる。一連の操作で効いてくるのが、位置も色も象徴的に設けられた黒いシリンダーだ。視野を欠損させることで、それぞれの部分が強度をもち、断片的なイメージ群が生み出され、生活の場にふくよかな豊かさをもたらしている。

数多の色は80にものぼる図面スタデ

ィのなかから決定されたもの。さらに色や素材によってツヤの具合も異なり、色彩と質感が丁寧にコントロールされている。「議論」という理知的な響きをもつ設計プロセスだが、机上で——まさしくオフィスのテーブルを囲んで生まれた理論を、実直で緻密な手仕事で実空間化しているのだ。

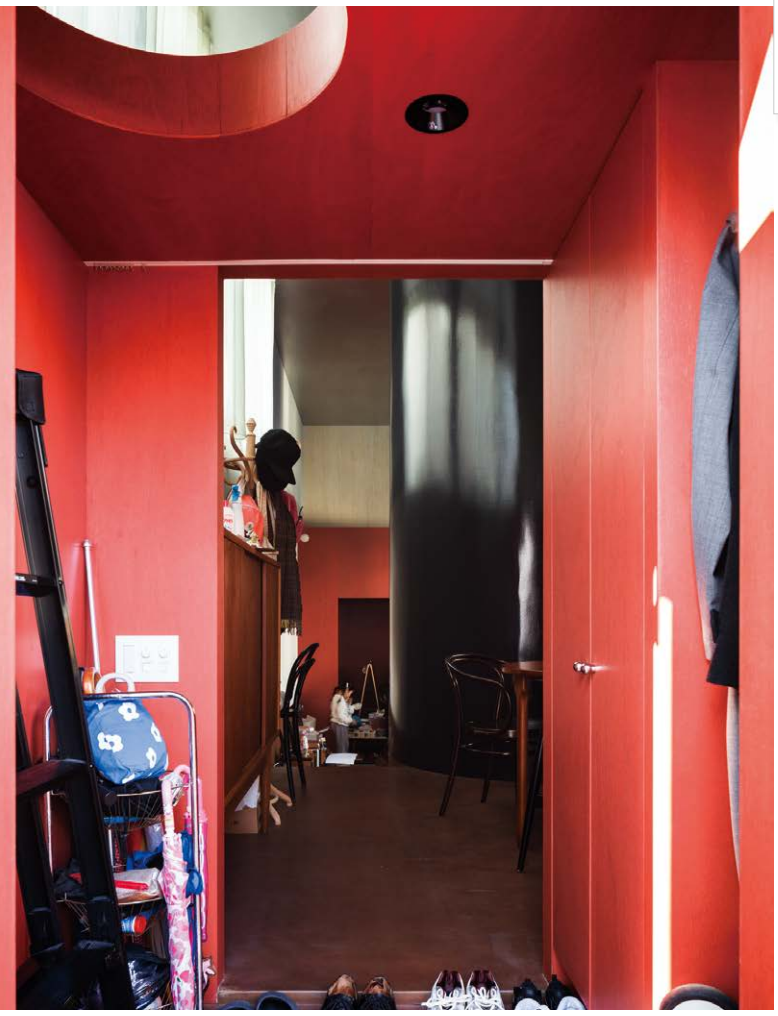
集まって相対化することで強度をもつ

「残像の家」に見る一連の形態の操作は、どこかポストモダン的でもあるが、色彩はル・コルビュジエのラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸や、リートフェルトなどプレモダニズムを想起させる。そんな印象を催すのは、ウルトラスタジオの設計活動そのものが、建築批評としての側面も併せもっているからではないだろうか。建築史上の大きな運動を顧みれば、いずれも前時代のアンチテーゼとして興ったものだ。ただし打ち倒すべき対象がなく、運動体もない今、建築家は何を拠り所とするべきなのか。個人の活動に思想をのせる時代でもなく、それをするには、社会課題が複雑化しすぎている。設計活動におけるコレクティブも、そんな時代性の表れのように思える。

「昨今、建築家には以前にも増して説明責任が求められていると思います。なぜこうしたデザインにしたのか、という問いに対する解が、建築家という一個人の嗜好という解では納得させられない時代になってきた。そこを突破したいという想いですね」（向山さん）

3人だからこそ生まれる議論があり、相対化できる眼差しがある。「議論の結果、必ずしも合意形成が生まれるわけではありませんが、合意が得られないのも寂しいような気がして」と語るウルトラスタジオの談話は、今の建築家と社会の関係性を如実に浮き彫りにしているように思える。笹田さんは、ポルトガルの建築家集団falaが来日したときのことをこう振り返る。「日本は同世代の建築家が集まって議論できる場があって羨ましいと言われたのですが、水平的でデモクラティックなことに意義があるのかもしれませんね」。建築家がかつてもっていた権威は時代にそぐわなくなっているとはいえ、社会のマジョリティに身をおもねることは職能とはいえない。そんな時代に対する答えのひとつが、「集まって、伝える」という選択肢ではないだろうか。





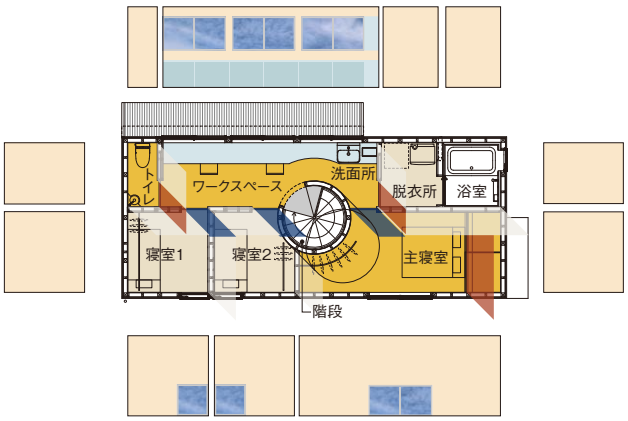
写真上／銀色のシリンダーから対称の位置にはその反射がグレー塗装で表現されている。下／赤い玄関の天井には小さな円形の開口。

平面図・展開図

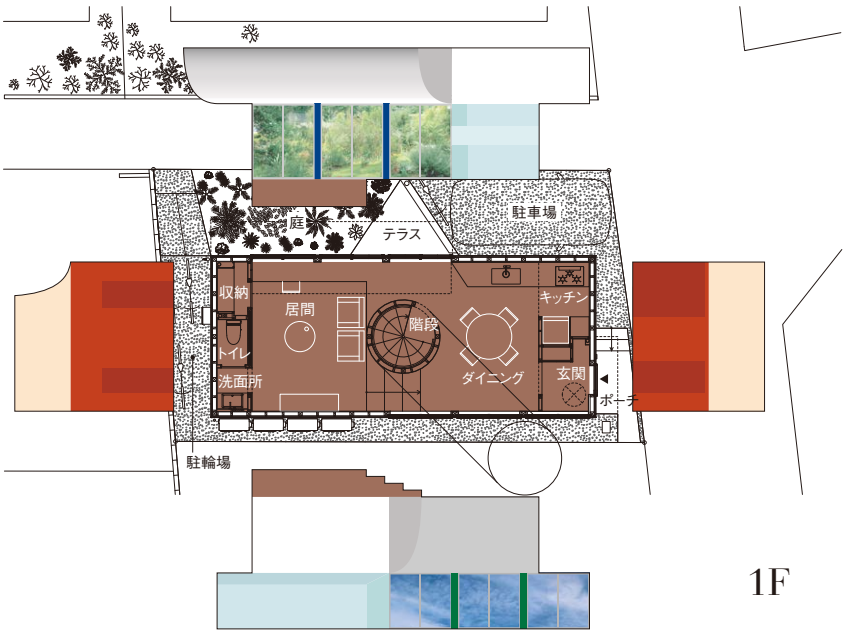
N

0 1 2m

1/200



2F

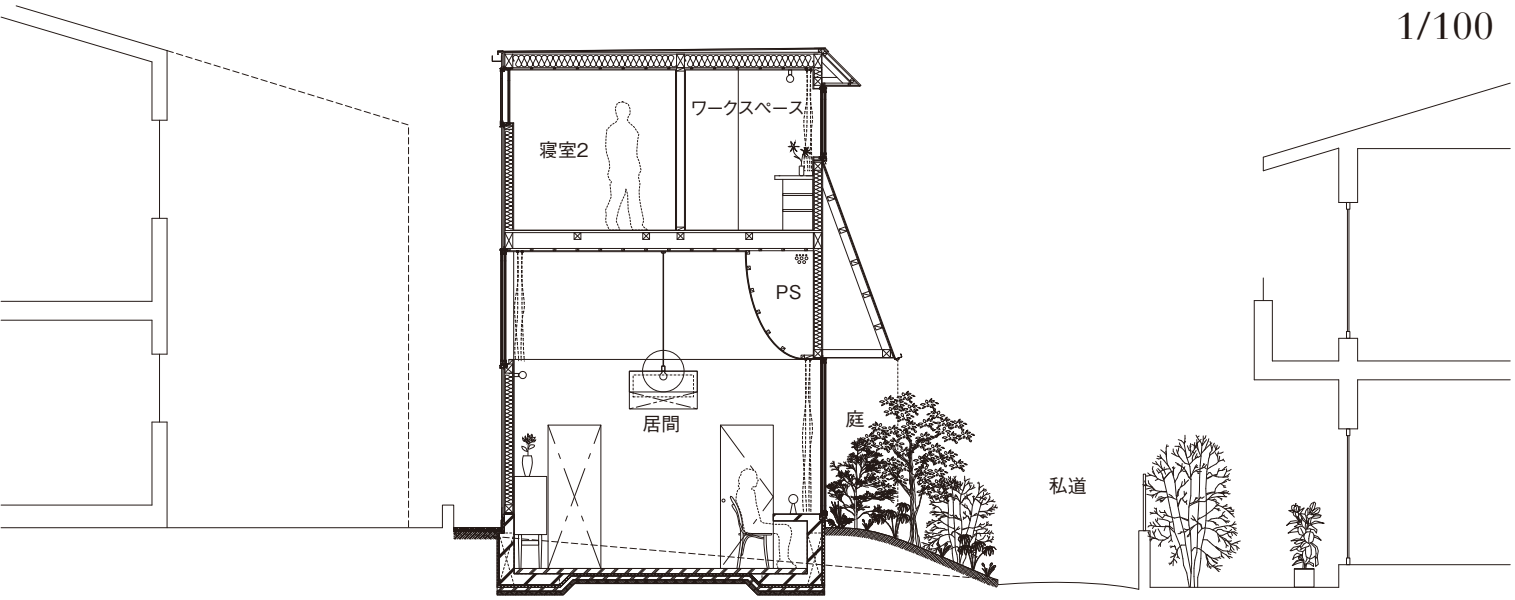


1F

断面図

0 0.5 1m

1/100





東側外観。

残像の家

建築概要	
所在地	東京都杉並区
主要用途	専用住宅
設計	ウルトラスタジオ
構造	ARSTR
施工	水沢住宅建築
階数	地上2階
敷地面積	88.43㎡
建築面積	40.99㎡
延床面積	81.98㎡
設計期間	2022年6月〜2023年1月
工事期間	2023年3月〜10月
おもな外部仕上げ	
屋根	シート防水、ガルバリウム鋼板小波板
外壁	窯業系サイディング
開口部	アルミ樹脂複合サッシ
外構	コンクリート刷毛引き舗装
おもな内部仕上げ	
居間	
床	コンクリート金ごて押さえ ユカクリート塗装
壁	ラワン合板 オイルステンクリア
天井	PB シルバーペイント
ダイニング・キッチン	
床	コンクリート金ごて押さえ ユカクリート塗装
壁	DICフネンソリッドカラー
天井	PB シルバーペイント
ワークスペース・洗面所	
床	シナ合板 オイルステンクリア
壁	構造用合板 EP
天井	PB EP全ツヤ

ULTRA STUDIO
ウルトラスタジオ

うるとらすたじお／2018年向山裕二により設立。19年に上野有里紗、20年に笹田侑志が参画。それぞれの海外で学んだ経験を生かしながら、東京を拠点に国際的に活躍する3人組の設計事務所。ウルトラスタジオのおもな作品＝「イメージング・ハウス」(23)、「nLDKX」(23)、「裏庭の冒険」(23)。

外観

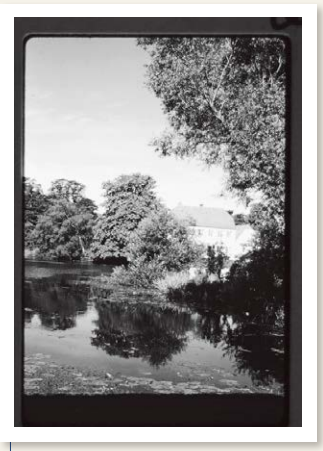


北側外観。路地に面して三角の庇を出し、その下に小さな庭を設けた。既存の高低差を生かし庭は斜面とした。

庭と軒下。建具のガラスと連続して見えるよう、手前の壁にはステンレス鏡面を貼った。



©三上祐三研究会



湖畔に面したヘレベックの事務所の外観。

「リン！　ビーチボールをかしてくれないか」と、叫ぶような声でヨーン・ウッツォンは長女のリンに近づくと、ビーチボールを手にしてプールの中に沈めては浮かしてを繰り返した。一見すると子どもと遊んでいるような風景だが、このときウッツォンが観ていたのは、水面に浮上する球面の形がその深度によって変化するも、「すべて同一の曲率でできている曲面だ！」という発見をした瞬間であった。

ヨーン・ウッツォンは、シドニーオペラハウスの設計者として有名である。9年間にもおよぶ長い設計期間を経ながら、途中で州政府の政権交代による影響を受け、無念なかたちでその表舞台から退いた。その悲劇も周知のことながら、シドニーオペラハウスは建築史上の傑作として現在もシドニー湾岸で輝いている。

彼の父オーゲ・ウッツォンは、首都コペンハーゲンから40㎞北上したヘルシンゲールという港町にある造船所で技師長を務めていた。引退後に、さらに北に6㎞離れたヘレベックという村に隠居した。ヨーン・ウッツォンは、コペンハーゲンの王立アカデミーで建築を勉強し、第二次世界大戦中は、隣国で活躍したアスプルンドの事務所で修業した。アルネ・ヤコブセンと席を並べた時期でもある。帰国後、コペンハーゲンで独立するが、1952年には父の近所に自邸を建設し、海岸沿いの幹線道路から小道に入ったところに立つ2階建ての借家を事務所として、設計活動を開始した。

ウッツォンの事務所は、デンマーク人と少数のスウェーデン人という構成で営まれていた。その事務所には、1m×2mのリノリウム貼り製図板にスイスのクールマン社製のドラフターが並べられていた。サンルームは模型の展示室となっており、シドニーオペラハウスのコンペに勝利してからは、その部屋に1／60の模型が鎮座していた。興味深いことに、その三次元曲面の建築模型はヘルシンゲールの造船所に発注して製作されたものであった。あの優雅な曲線には造船技術が必要だったのである。

1957年に、ウッツォンはシドニーオペラハウスの国際コンペに勝利した。32カ国233の応募案の頂点に立ったのだ。この勝利はウッツォンにさまざまな変化を与えた。コンペに提出した絵はダイヤグラムでしかなく、それを実施設計に展開するにあたり、エンジニアを必要としていたときにタッグを組んだのが構造家オヴ・アラップだった。彼はイギリス生まれのデンマーク人だったため、ふたりはデンマーク語で会話をすることができ、それが何よりもウッツォンにとっては重要だったという。ふたりはデンマークとイギリスを行き来しながら、形態と構造のエスキスを重ねていき、その過程でアラップはウッツォンに大屋根に「標準化」のルールを求めた。構造形式と外壁のタイル貼りを考えるうえで、数学的な秩序を必要としたのだ。ウッツォンはそれを延々と考えたあげく、球体を切断するという冒頭の閃きに到達したのである。つまり、同じ球体でも切断面を変えることで同一曲率の大小異なる曲面を獲得できるのだ。

もうひとつの大きな変化は事務所をシドニーへ移動したことだ。しかし、これはよくなかった。オペラハウスが立つ敷地の横に構えられた事務所は、騒音と人混みに加えて、つねに記者やテレビなどのメディアに囲まれており、ヘレベックとは正反対の環境だった。あるスタッフは、この雑踏に満ちた環境がウッツォンの思考と判断の歯車を徐々に狂わせたと回想している。ウッツォンにとって重要だったのは、バルト海とブナの木々に囲まれた森林で気の置けない数人の仲間に囲まれている環境だったのだ。平穏のためには施主との距離が離れていることも重要だっただろう。ウッツォンは自らの机さえも事務所に備えていなかった。スケッチも自宅ですることを好み、よいアイデアができると仲間と議論して設計を展開することを楽しんだ。ウッツォンは、フィンランドの巨匠アルヴァ・アアルトを尊敬しており、スタッフにアアルトの作品集を必読書としていたくらいだ。そんな環境は自宅と事務所の2拠点活動としたアアルトの働き方とも重なる。ウッツォンにとって、外界との接続は1本の電話線のみでよかったのだ。

最後に、ウッツォンの事務所にいたスペイン人建築家ラファエル・モネオは、その孤独感が彼の作風と直結していると語っており、晩年の名作バウスヴェア教会やキャン・リスもどこか孤独にたたずむ峻厳な空気感をまとっているかのようだ。いわば世界を舞台に日々動きまわる建築家の対極にウッツォンは位置し、自身の環境を堅持することこそが肝要だと教えてくれる。

事務所には巨大な模型が鎮座していた

ヨーン・ウッツォン
Jørn Utzon

1918年デンマークのコペンハーゲンにて生まれる。42年に王立アカデミーを卒業し、スウェーデン・ストックホルムのG.アスプルンド事務所にて勤務。50年にコペンハーゲンにて事務所を開設し、52年にはヘレベックに自邸の建設を機に活動の拠点も移動する。57年シドニーオペラハウス国際コンペに勝利し、63～66年はシドニーに事務所を移転。66年に同プロジェクトの辞任とともに帰国。2008年にコペンハーゲンにて死去。

やまむら・たけし／1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。06年バルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。12年同大学院博士後期課程修了。12～15年ドミニク・ペロー・アルシテクチュール勤務。16年YSLA Architects設立。早稲田大学専任講師などを経て、20年東京工芸大学准教授。博士（建築学）、一級建築士。

古写真で
みる
建築家の
アトリエ

第9回

古写真を発掘し、
昔の建築家の
アトリエをのぞく。
この場所で、
名作が生まれた。

静寂を好みながら、雑踏が狂わした オペラハウス

文／山村 健
Yamamura Takeshi

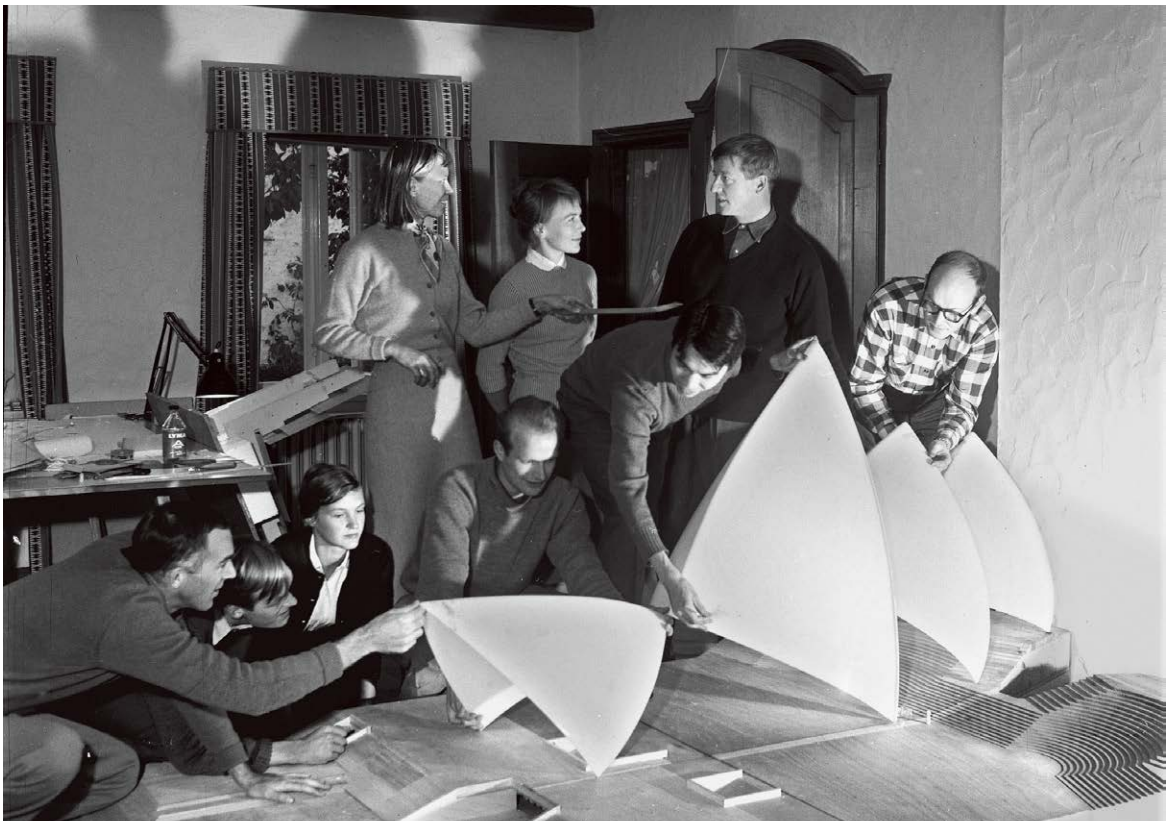


Photo:Arne Magnussen Denmark 1958

ヘレベックの事務所に、1／60スケールで製作されたシドニーオペラハウスの模型が到着したときの様子。ウッツォンは一番左。

ヨーン・ウッツォン
Jørn Utzon



©三上祐三研究会



©三上祐三研究会

構造家のオヴ・アラップ（右）とウッツォン（左）が、事務所で打ち合わせしているときの様子。

今回は、ウッツォン事務所に在籍していた建築家・三上祐三氏が撮影した古写真をお借りしました。ウッツォンの日常を写したたいへん貴重なものです。



旧渡辺甚吉邸　設計／遠藤健三、山本拙郎、今 和次郎

Endo Kenzo, Yamamoto Setsuro & Kon Wajiro × Fujimori Terunobu

モダニズム直前の邸宅



1／左手が入口であり、その上部の木造のつくりからチューダー様式と知れる。

連載 現代住宅併走 第六十回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi
写真／普後 均
（設計者ポートレイトを除く）



2

2／入口。上部のチューダーの刻み。

3／電話室。頂部の照明は今和次郎による。

3



現代住宅併走

Endo Kenzo, Yamamoto Setsuro & Kon Wajiro × Fujimori Terunobu

もう50年も前になるが、1974年、大学院生のとき、堀勇良と建築探偵団を結成し、東京の町を地図を手にカメラを肩に、忘れられた西洋館を求めて歩きはじめたとき、港区で1棟の西洋館と出会った。そのことを雑誌に書いたのが呼び水となり、関係者と連絡がつき、さらに2022年には前田建設の手で移築が実現し、公開され今に至る。それが〈旧渡辺甚吉邸〉で、〈甚吉邸〉と愛称されている。

しかし取り上げるには小さな躊躇があった。このシリーズは戦後のモダニズム住宅を旨とし、戦前のものでも、レーモンドの「赤星鉄馬邸」(1934)や土浦亀城の「旧土浦亀城邸」(35)と、戦後モダニズムに直結する作品に限ってきたからだ。

一方、〈甚吉邸〉は、竣工は1934(昭和9)年、全体リーダーは山本拙郎、設計施工は遠藤健三、細部装飾は今和次郎と、竣工年は日本のモダニズム誕生期にあたるものの、手がけた面々は3人とも日本のモダニズムとは直結しない。しないけれども、モダニズム直前の面々にちがいなく、遠藤健三は戦後の建設業のリーダーの一画を占めるし(大日本土木の創業者)、山本拙郎は昭和戦前の住宅改良の担い手で、モダニズム住宅の名手・吉村順三を世に出す働きもしている。今和次郎は大正末から昭和初期にかけて日本の建築界の最先端を、それも先端すぎるあたりを駆けぬけ、戦後は、吉阪隆正の師として知られる。

わかりやすく日本のモダニズム成立史上に位置付けるなら、山本拙郎と今和次郎は、明治以来の歴史主義様式と新しいモダニズムデザインの中間で宙吊り状態にあった。

まず、わかりやすい特徴であるスタイルから述べよう。イギリスのチューダーである。チューダー・ゴシックとも称されるように、中世イギリスの教会建築のなかで花開いたデザインで、ルネサンス以後のクラシック系スタイルと対比的に、人を心地よくさせるような自由な装飾性、手仕事を前面に出した味わい深さを特徴とする。このクラシック系と比べたときの比較的自由な装飾性と手仕事の味わい深さが、モダニズム直前のウィリアム・モリスを動かし、ここからアール・ヌーボーなどのモダン・デザインが生まれ、さらにモダニズムが誕生している。

チューダーらしさで一番わか

4

4／家族食堂。天井装飾はチューダーのモダン化。

5



5／玄関から広間。右手階段から2階へ。6／手前居間と奥にサンルーム。

6





7／今和次郎デザインのスイッチプレート。8／応接室。シャンデリアも今和次郎デザイン。

7

8





9／2階の踊り場。

い。彼のデザイン力は民家のスケッチや雑誌の表紙で知っていたが、ちゃんとした建築を舞台に発揮したのはこれが唯一となるばかりか、ランプシェードやラジエーターグリルに始まり、スイッチプレートやブザー、さらにはディナーセットやナイフ・スプーンまで手がけている。日本の近代建築史をひもとくと、昭和最初期のモダニズム出現直前の大正期に分離派などロマンチックな造形運動がおこったことが知られているが、じつは今はそうした運動の先駆的参加者でもあった。

と書き綴ってきたが〝住宅改良の旗手としての山本拙郎らしさはいったいどこにあるんだ〟と訝しく思う読者もおられるだろう。最初は私もそうだった。平面図を見ると、誰でも〝なんでこんなに出たり入ったりゴチャゴチャしているんだ〟と思って当然で、玄関から入って順に目で追っていくと、平面の意図がまったくわからない。長く西洋館と付き合ってきた建築探偵も迷路に迷い込んだような気分になる。

この疑問含みの平面の謎を解いてくれたのは、竣工にあたり刊行されたパンフレットにのる今和次郎の「感想」と題した次の文だった。

「間取及全計画の概要は、山本拙郎氏の心行くまでに練り上げたものだと云うのだから、邸宅建築としての根幹にゆるぎはない」

と述べたうえで、

「階段に導かれて階上に至ると、寝室、夫人客室及浴室は他の一域に夫々とられている。そして階上と階下との区別をなくし、邸宅内全体を柔らかくする為にホールの床を空洞にして手摺を囲らして透かしている」。

上がったり下がったりとゴチャゴチャ感のきわまる階段室と広間のふたつからなる空間は、吹抜けによって上下階をつないで一体化し、邸宅の室内全体を「柔らかくする」ためだった。

「柔らかくする」という表現はわかりづらいが、各部屋を決めている壁という存在の区画性を〝ゆるめる〟ということにちがいない。確かに、各部屋は上下一体化した中央の空間に向かって直接的に開いている。そして、中央の空間に向かって開くため、花芯のまわりの花弁のように西洋館としては異例の凹凸の激しい平面になった。

空間の一体化という20世紀住宅ならではの主テーマに、中小住宅ではなく邸宅を舞台に山本拙郎が取り組んだのがこの家であったが、上手に解けなかった、と評さざるをえない。

しかし、チューダーの自由な装飾性と手仕事の味わい深さを、はち切れそうにぎゅう詰めにした住宅は例がなく、濃厚なインテリアを、読者にも一度、味わっていただきたい。

9

りやすいのは、外壁に見られる垂直性を強調した柱で、一部に装飾的に取り込まれたバッテンの木材も特徴。2階は木造、1階は石積みとなるが、上半分だけ木造だからハーフ・チンバー（半木造）ともいうが、この半分の意味は、木材のあいだにレンガを詰めたのが来歴ともいう。

住む人や、訪れた人を心地よく包む装飾性と手仕事の味わい深さがより強く現出しているのは外観よりインテリアで、露出する木材の表面すべてに鑿（のみ）と斧でゴシック系の装飾が刻み込まれる。ゴシックの自由な装飾性にかける想いが集中的に発露するのは応接室の親柱で、手づくりの味と内側から盛り上がるような存在感が目を奪う。

こうした木による空間の要所要所に配された鉄の造形を手がけたのが今和次郎にほかならな

現代住宅併走

Endo Kenzo,
Yamamoto Setsuro
& Kon Wajiro
×
Fujimori
Terunobu



10／夫人室。日本には珍しいロココ様式。11／和室も付く。



10

11

Profile

遠藤健三

Endo Kenzo



1898年、岐阜県生まれ。早稲田大学付属工手学校建築科に学び、卒業後はあめりか屋に入り、後、独立して大日本土木を創業する。1992年没。

山本拙郎

Yamamoto Setsuro



1889年、高知県生まれ。早稲田大学建築学科で今に学び、卒業後はあめりか屋に勤め、日本最初の住宅作家となる。“住宅は建築家のものではなく住む人のもの”との主張を日本で初めてした建築家。1944年没。

今 和次郎

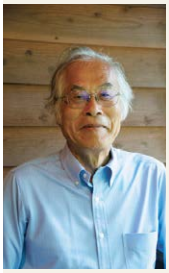
Kon Wajiro



1888年、青森県生まれ。東京美術学校(現東京藝術大学)図案科卒業後、早稲田大学建築学科で教える。日本の民家研究の草分けとなり、また考現学を創始し、建築界と社会に大きな影響を与える。1973年没。
写真提供／㈱筑摩書房

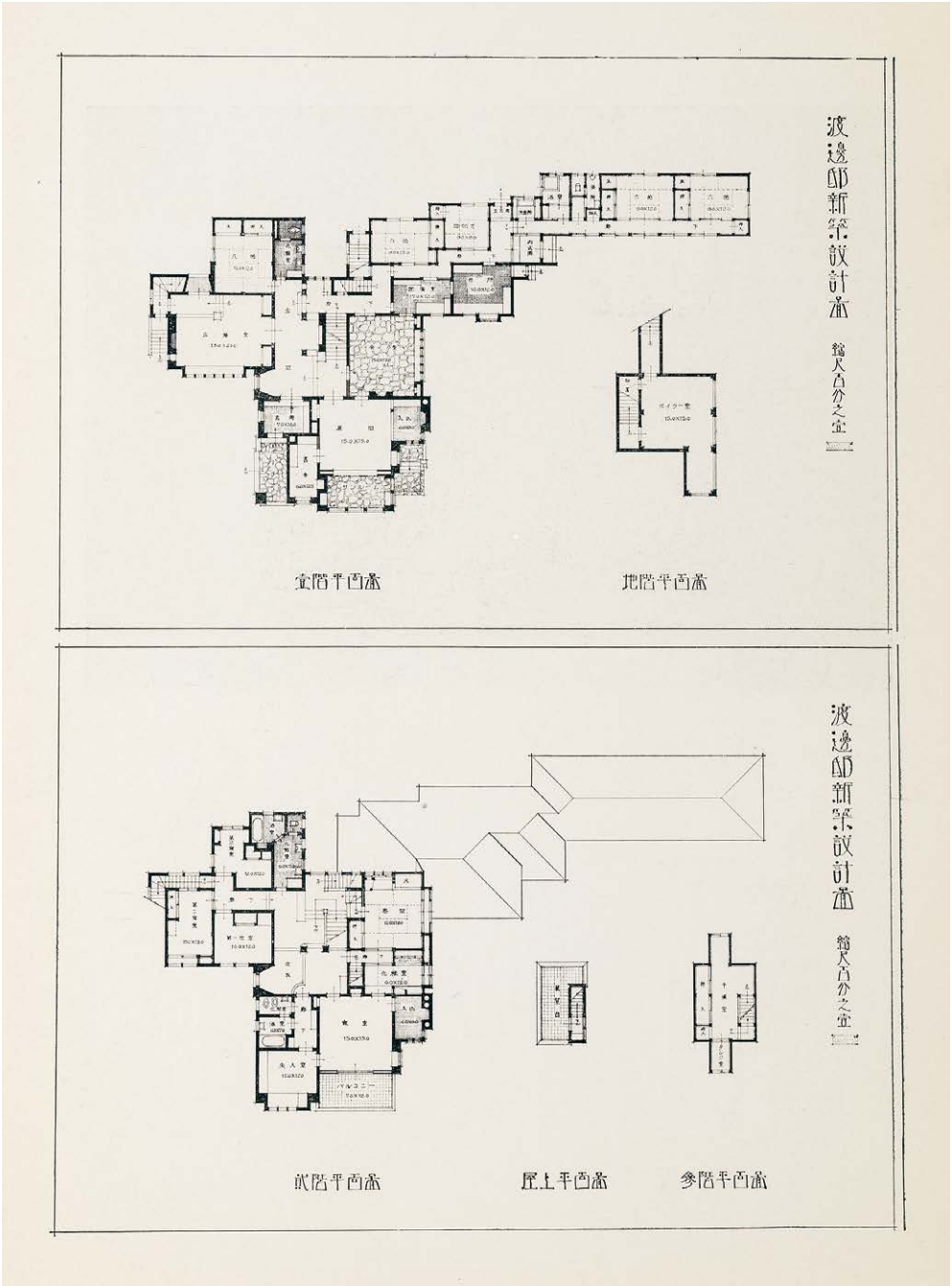
藤森照信

Fujimori Terunobu



建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。「旧渡辺甚吉邸」名誉館長。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞、「ラコリーナ近江八幡草屋根」(15)で日本芸術院賞。

竣工時の各階平面図





旧渡辺甚吉邸

南西側（竣工時は南東）外観。

建築概要	
所在地(移築後)	茨城県取手市
主要用途	専用住宅
設計	実施設計:遠藤健三
	全体計画:山本拙郎
	細部装飾:今和次郎
移築復原	
設計	前田建設
施工	前田建設
建築面積	256.05㎡(車庫棟含む)
延床面積	426.34㎡(車庫棟含む)
階数	地上2階、塔屋1階
構造	木造
竣工年	1934年
移築年	2022年
図面提供	前田建設

大阪ヘルスケアパビリオン

Osaka Healthcare Pavilion

うねる天井の下に多様なトイレ群

取材・文／大山直美　写真／傍島利浩

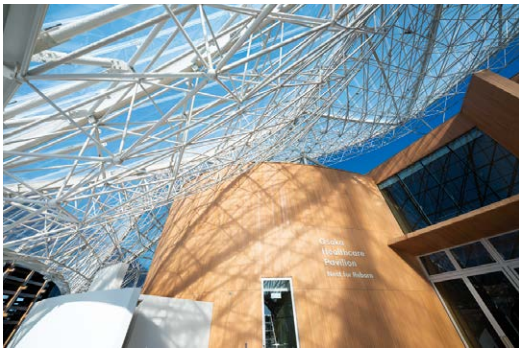
当事者と議論して生まれたユニバーサルデザイン

2025年4月13日から半年間開催される「大阪・関西万博」会場の一角に誕生した「大阪ヘルスケアパビリオン」は、大阪府と大阪市を中心に、地元の産学官民が連携し、大阪の魅力と未来像を体験できる注目の施設だ。2階建ての本館は吹抜けのアトリウムを中心に、楕円の平面の各展示エリアが有機的に重なりあうプランで、全体を鳥の巣のような膜屋根が覆い、屋根からは定期的に水が流れ落ち、循環する。各展示エリアはアトリウムを取り巻くスロープによって結ばれ、ユニバーサルデザイン（UD）を積極的に取り入れている点も見逃せない。



入口側の外観。透明な膜屋根に覆われている。

建築の魅力もさることながら、ユニークなのがアトリウムに面した1階に設置されたトイレ。トイレも展示スペースのひとつとして計画され、「誰もが使いやすい、ミライのトイレ」を目指したという。東北福祉大学教授の石塚裕子さんをエキスパートとして、車いす使用者、視覚障がい者、聴覚障がい者、精神障がい者、知的障がい者、発達障がい者と各介助者、LGBTQ、医療的ケア児や子育て中の親など、従来のトイレに不便を感じる「お困りごと当事者のみなさん」22名のメンバーと、大阪府・大阪市が設立した公益社団法人2025年日本国際博覧会大阪パビリオンの担当者、TOTOなどの協力企業の関係者が集まって「UD推進チーム」を結成。さらに設計者や施工業者も加わって、設計段階から10数回もの協議を重ねてきた。複数のグループに分かれ、図面に合わせて各個室のピースを「福笑い」形式で配置して検討したり、床に広げた原寸大の図面の上を実際に歩き、動線や待ち列の位置を確認したりしたという徹底ぶり。



鉄骨トラスは草木を集めた「鳥の巣」のイメージ。

前代未聞ともいうべきプロセスを経てどのようなトイレが生まれたのか。開館前のトイレを取材し、同公益社団法人の北村



膜屋根には水が流れ、水盤に滝のように落ちる。

選べるトイレ

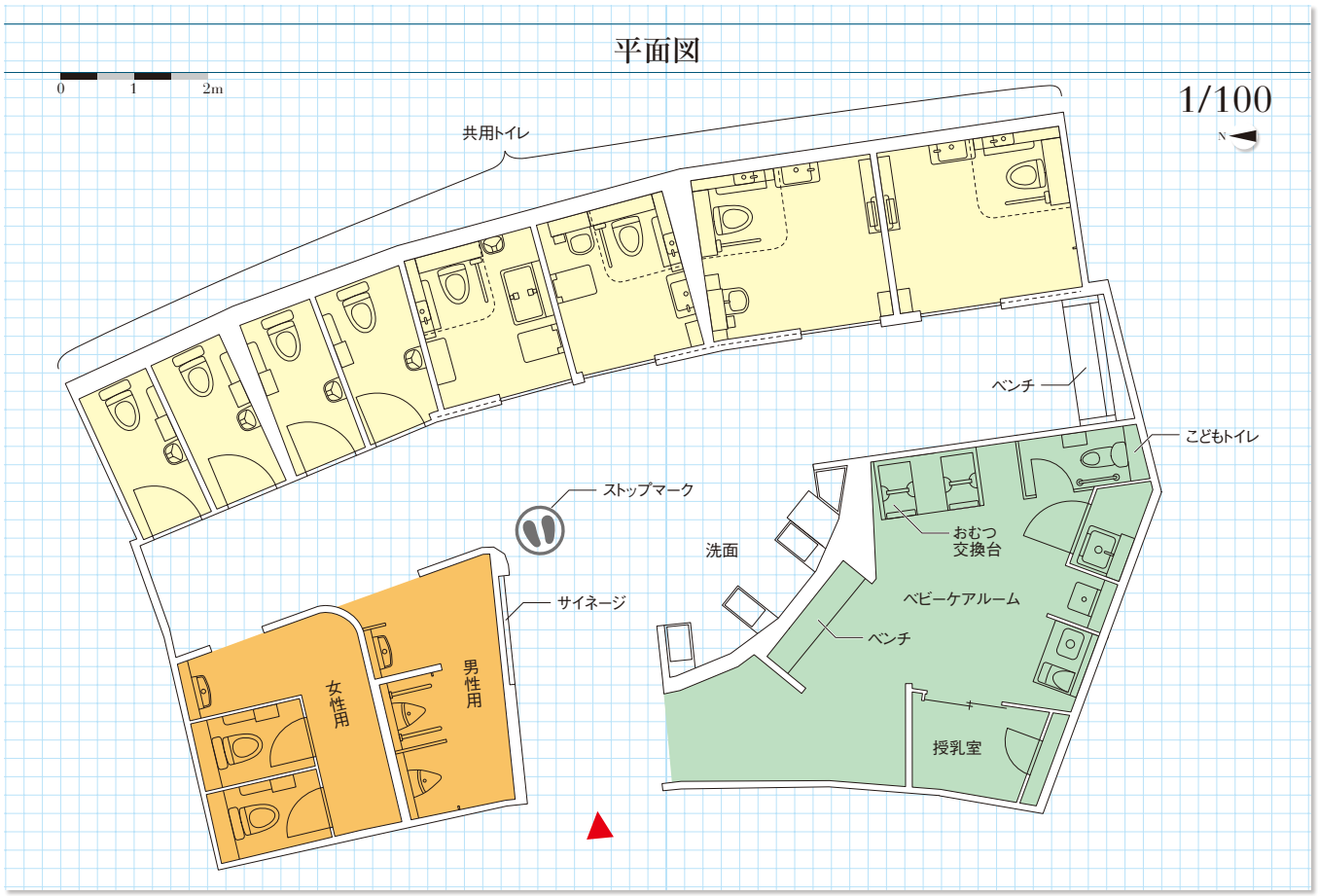
Osaka Healthcare Pavilion



トイレ入口

右にベビーケアルーム、左に個室群。さまざまな用途を示したピクトグラムが掲示されている。

平面図

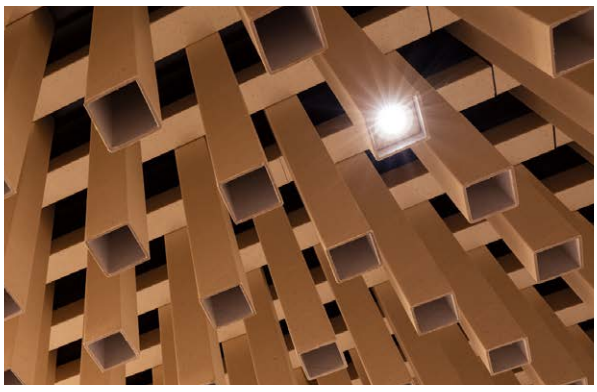


紙の筒がうねる天井



↑　全景

サイネージの画面に個室の使用状況が表示され、列の先頭を示すストップマークからは、個室の空き状況を見渡すことができる。



←　天井の詳細

紙おむつと淀川のヨシを再利用した紙管。照明も組み込まれている。

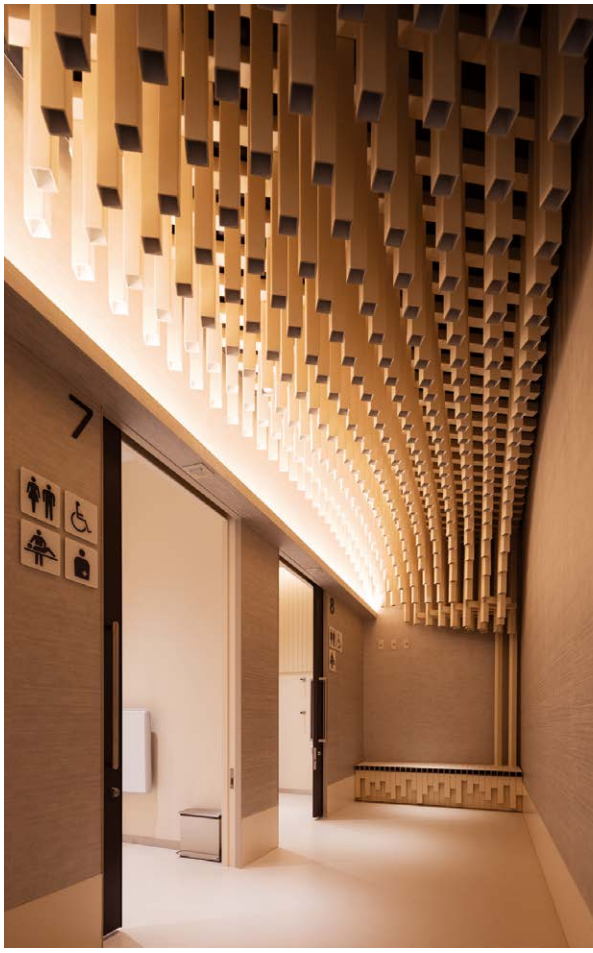
伸子さん、設計を手がけた東畑建築事務所の平野尉仁さんと武藤優哉さんにお話を聞いた。

みんなが選べるトイレ

平面図のとおり、トイレのプランは明快だ。中央の通路から入ると、まず右手に広いベビーケアルーム。こどもトイレとおむつ交換台、授乳室、ベンチが設置され、母親が乳児に授乳するあいだ、幼児が用を足したり父親と一緒に過ごすこともできる。

通路を奥に進むと左手の壁には各ブースの使用状況がわかるサイネージが設置され、床には待ち列の先頭を示すマークがある。その位置に立つと、正面の壁沿いに左右に並んだ8つの個室ブースが一望できる。左右にブースが4つずつあり、右手の4つは車いす対応のブース。個室によって、介助用ベッド、着替え台、ベビーチェアなど備え付けの設備が異なるが、各扉の脇にピクトグラムが明示されており、わかりやすい。

よく見ると、右端の個室用のピクトグラムのみほかより大きいが、北村さんによれば、ストップマーク位置から最も遠いため、視覚障がい者には見えづらいという配慮から差をつけたそうだ。一方、左側4つの個室ブースは右麻痺か左麻痺かで使い





← ピクトグラム

個室前のピクトグラム。左右どちらに手すりが付いているのかもわかる。

ピクトグラム →

奥のピクトグラムは視認性向上のため大きい。ベンチも紙管。



↓ 車いす対応トイレ

介助用ベッドやオストメイトパックなどがある。

↑ 車いす対応トイレ

スペックが異なり、ベビーシートなどがある。





非常灯 →

個室内の非常呼出ボタンを押すと、扉前の非常灯が点灯する。

分けられるよう、手すりの位置を変えているが、ピクトグラムも左右反転になっており、一目瞭然。これは武藤さんがオリジナルでデザインしたものだという。

さらに、男女別々のトイレまで確保した意味について、北村さんは次のように語る。

「ワークショップで話し合っていると、目の見えない方は普段使い慣れた狭いトイレのほうが、どこに何があるかがわかりやすいから、男女トイレを使いたいとおっしゃっていましたし、女性のなかには隣の個室に男性が入っていると思うと心理的に用を足しづらい人もいるのではという意見も出ました。一方で、普段、男女が分かれているトイレに入りづらく困っているLGBTQの人が多機能トイレに入ると、外見からはわかりにくく、順番を待つ車いす使用者から、なぜ多機能トイレを使っているのかと訝しまれるといった話も聞きました」

トイレに関して、これまで自分が感じたこともないさまざまな不便さを抱えている人々が大勢いることを知り、さして不便さを感じずに使える人も、彼らのような人も、一緒に並んで自分が使いたいトイレが選択できる——そういう空間を目指したいと考えたと北村さん。ある人の困りごとを解決しようとすると、それがかえって異なる障が

さまざまなニーズに対応



↑　ベビーケアルーム

こどもトイレがあるだけでなく、おむつ替えや授乳などに対応。



↓　女性用

専用の個室とともに、専用の手洗いも設置されている。

↑　男性用

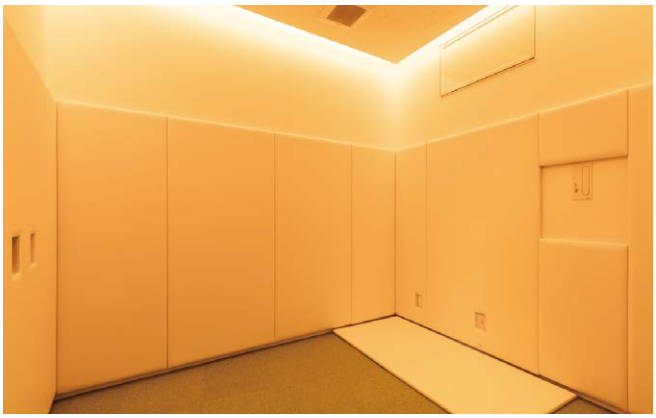
共用トイレとは別に、男女別の専用トイレ。男性用には小便器を設置。



↓　カームダウン・クールダウンルーム

落ち着き（カームダウン）、冷静になる（クールダウン）ための個室。事前にパニックを防ぎ、状況に合わせて照明の色を変えることができる（写真左右）。トイレとは別の場所に配置されている。





大阪
ヘルスケアパビリオン

Osaka Healthcare
Pavilion



正面外観。

建築概要

所在地	大阪市此花区夢洲中1丁目1-20
	（2025年日本国際博覧会会場内）
事業主	公益社団法人2025年日本国際博覧会
	大阪パビリオン
主要用途	遊技場、展示場、飲食店、物販店舗、事務所
設計	東畑建築事務所
施工	竹中工務店大阪本店
敷地面積	約10,500㎡
建築面積	約5,000㎡（本館棟）
延床面積	約8,000㎡（本館棟）
階数	2階
構造	システムトラス構造、骨組膜構造、
	鉄骨造（本館棟）
設計期間	2021年12月～2023年3月
施工期間	2023年4月～2024年10月

おもなTOTO使用機器

・パブリックコンパクト便器フラッシュタンク式
　CFS498B一式#NW1
・ウォシュレットアプリコットP
　AP2A　TCF5831AUP#NW1
・壁掛壁排水自動洗浄小便器　UFS900WR#NW1
・コンパクト・バリアフリートイレパック
　UADAK01L1A1AN一式
・ウォシュレットアプリコットP
　AP2AK　TCF5841AUP#NW1
・一般鏡 角形600×900　YM6090A
・コンパクト・バリアフリートイレパック
　UADAK11R1A1AD一式
・コンパクト・バリアフリートイレパック
　UADAK01R1A1AN一式

いがある人には不便になることもあり、22名のみなさんもワークショップを通じて多様な学びがあったとのこと。一人ひとりが相手の立場に立って真剣に考える機会がもてたことは、貴重な体験だったと振り返る。

　平野さんはこう語る。

「今回のトイレは単なるオールジェンダーではなく、何かを切り捨てず選べるようにした点が重要です。マイノリティとマジョリティを転換したというか、どちらかといえばマイノリティにフォーカスを当てた、広い意味でのユニバーサルデザインですね。といっても、決してこれが正解ではなく、オープン後はきっとここが使いにくいといった不満も出るかもしれませんが、そういう意見が出てこないと世のなかは何も変わらない。そのための試みなのです」

角紙管の天井

　ところで、内装でひときわ目を引くのが、うねったような天井の意匠やベンチ、壁面などに多用されている四角柱状の素材。武藤さんによれば、これは紙管の一種で、なんと原料は淀川の河川敷に生えるヨシと紙おむつ。TOPPAN、紙管メーカーの日本化工機材、淀川のヨシの再生事業に取り組む地元・大阪のデザイン事務所、アトリエMayが特注で製作したそうだ。

「淀川のヨシは雅楽の篳篥（ひちりき）のリードに使われるなど伝統ある素材です。また、二酸化炭素の吸収や水質浄化の作用もあるのですが、近年は十分活用されず保全が困難になっています。せっかくなら、そうした地元の自然素材を生かしたいという強い想いがありました。一方、ゲル材が入った紙おむつはリサイクルが難しく、これまでは多くが一般廃棄物として捨てられていましたが、パルプの純度としては非常に上質な材料が使われており、そのまま捨てるのはもったいない。そこで、そのふたつを混合した再生紙による角紙管を開発し、内装材として活用したのです。未来では、自然素材やリサイクル材を活用した内装材があたりまえになることも期待しています」と武藤さん。

　今回のプロジェクトを通じて感じたこと、このトイレが未来に投げかけるものについて、北村さんはこう話す。

「ここまで先進的なトイレが近い将来、世のなかにたくさん出てくるとは思いませんが、この機会にひとりでも多くの人に、普段何げなく使っているトイレに対して、こんなにいろいろ困っている人がいることを知ってもらえたらうれしいですね」

　平野さんにも水を向けると、こんな答えが返ってきた。

「トイレに的を絞り、ここまで大勢にディテールまで話を聞いたことがなかったので、公共施設や学校などの設計においても、もう少し使う人の声を聞けば、トイレに限らず、建築全体がもっと使いやすいものになるのではないかと感じました」

　一見さりげないデザインのトイレにちりばめられた小さな工夫の数々。そこには、トイレや水まわり空間の未来を一歩先へ進めるヒントがたくさん眠っているようだ。



Muto Yuya

東畑建築事務所
設計室
技師

武藤優哉



Hirano Yasuhito

東畑建築事務所
設計室
部長

平野尉仁



Kitamura Nobuko

公益社団法人2025年
日本国際博覧会
大阪パビリオン
展示・建築グループ
建築整備課長代理

北村伸子

篠原一男 空間に永遠を刻む ——生誕百年 100の問い

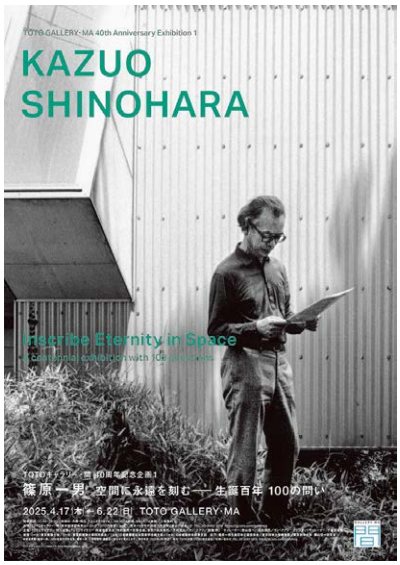
Kazuo Shinohara: Inscribe Eternity in Space—A centennial exhibition with 100 questions

2025年4月に生誕100年を迎える建築家・篠原一男。
本展では、建築家の奥山信一氏（東京科学大学教授）、
貝島桃代氏（アトリエ・ワン共同主宰、ETHZ Professor of Architectural Behaviorology）、
建築史家のセン・クアン氏（東京大学特任准教授、ハーバード大学デザイン大学院講師）をキュレーターに迎え、
生涯を通して自らに「問い」を投げかけつづけた氏の建築家像を、「永遠性」をテーマに再考します。

篠原一男 空間に永遠を刻む——生誕百年 100の問い

本展キュレーター 奥山信一、貝島桃代、セン・クアン

先導的建築家の多くが都市空間の進展と直截に連動した建築コンセプトの構築に邁進していた日本の1960年代半ば、10m四方の中心からわずかに外した位置に1本の直線を走らせた単純な平面形を瓦葺きの宝形屋根で覆った住宅と、ほぼすべて土間床の歪んだ平面形の広間に地中へ沈む寝室を接続させた異様な住宅で、篠原一男は「空間の永遠性」を表明した。これらふたつの住宅は、対照をなす祖型的な空間イメージを込めて「白の家」（66年）、「地の家」（66年）と命名された。「白の家」は2008年に、「地の家」は25年に、原形をとどめたまま次なる継承者へ引き継がれ、またそれらに先行する作品「から傘の家」（1961年）も、2022年の秋にスイス、バーゼル近郊（ドイツ、ヴァイル・アム・ライン）のヴィトラ キャンパス（＊1）へ移築再建が完了している。個人住宅の存続が困難な日本の社会的風土のなかで、約半世紀前の篠原の予言が今、少しずつ現実化しつつある。

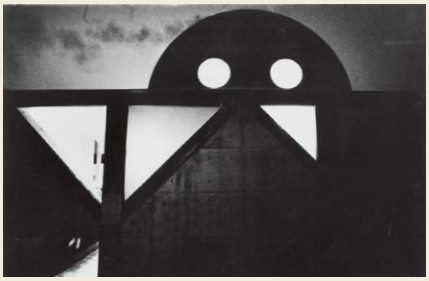


展覧会ポスター。
Photo：GA Photographers　Design：Hayashi Takuma Design Office

篠原は、その生涯を通じて数多くの「問い」を自らに投げかけることで創作の前進を図った建築家である。そうした「問い」のなかでも「永遠性」の表明は、変動する時間を建築の仕組みに内蔵させたメタボリズムへの対抗意識からの発露ではあったが、その逆説的視点を超えて、時間を透徹する建築空間の固有性を希求しつづけた篠原の創作の根幹を終生支える思想となった。

グローバル資本主義が蔓延する現代社会で最も見失われたのは、この射程の長い時間感覚を含んだ建築の思想である。今回の記念展では、この見失われた思想を、生涯をかけて言葉と空間の両輪で刻印しつづけた建築家・篠原一男の活動を再考する。

「空間の永遠性」というテーマに即して、3つの展示空間それぞれを以下の方針で特徴付けた。導入部となるGALLERY1では、「永遠性」表明の発端となった「白の家」、「地の家」、そしてそれに先立つ「から傘の家」を、展示室の天井高さいっ



上原通りの住宅（1976年）。 ©Koji Taki



谷川さんの住宅（1974年）。 ©Koji Taki

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY · MA

次回予告

(仮)1980年以降生まれの建築家展「新しい建築の当事者たち」

建築を取り巻く状況はますます複雑化し、建築にかかわることの主体性が失われつつある状況のなかで、「EXPO2025 大阪・関西万博」の施設を設計した建築家たち。現実に向きあい当事者として建築に取り組む彼らの奮闘を通じて、これからの時代に建築に何ができるのか、等身大の回答を探る試みです。

2025年7月24日(木)～10月19日(日)

GALLERY·MA 間

TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日、夏期休暇、年末年始、展示替え期間。ただし5月3日(土)、4日(日)は開館、6日(火)は休館
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

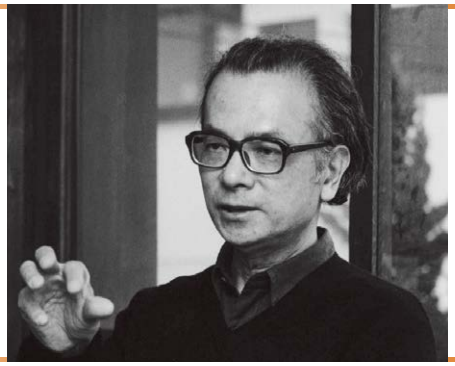


https://jp.toto.com/gallerma

TOTO GALLERY・MA

57

会期／2025年4月17日(木)～6月22日(日)



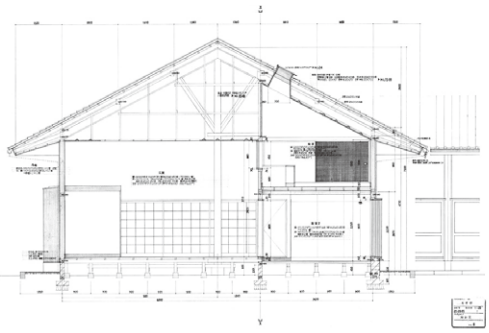
提供／東京科学大学奥山信一研究室

篠原一男
Shinohara Kazuo

しのはら・かずお／1925年静岡県生まれ。東京物理学校数学科(現・東京理科大学)を卒業し、数学の教職を経て、東京工業大学建築学科(現・東京科学大学)に入学。53年に卒業、同大学で86年まで教鞭をとる。退職後、篠原アトリエを設立。イエール大学、ウィーン工科大学客員教授。2006年逝去。
日本の伝統様式への洞察から独自のモダニズム理解を経て、現代都市と交感した様式へと作風を展開し、住宅建築を中心として建築の創作活動を実践。その間一貫して住宅と都市に関する建築理論を残した。おもな著作に、『住宅建築』(紀伊國屋新書、1964年)、『住宅論』(鹿島出版会、70年)、『超大数集合都市へ』(エーディーエー・エディタ・トーキョー、2001年)など。1972年「未完の家」以後の一連の住宅で日本建築学会賞、2010年に第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展記念金獅子賞を受賞。

ぱいに引き伸ばした内観写真と、篠原研究室制作の模型、製本図面などの貴重な資料によって紹介する。白眉は篠原研究室でバイブルと崇められた故・大橋晃朗(＊2)真筆の「白の家」のトレーシングペーパー原図全25枚である。

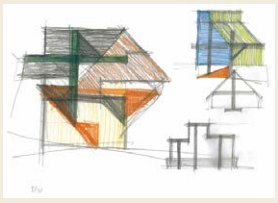
中庭では、80余年におよぶ篠原の活動年表を基軸に「100の問い」を壁面に散布した。篠原にとって言説提示は、物質を伴わないがゆえに実作以上に永遠性を刻む重要な作業であった。また1枚の写真に建築の意味を焼きつけることで篠原は「空間の虚構性」を表明したが、それは原則非公開の個人住宅の社会性を担保すると同時に、「永遠性」を背後で支えるもうひとつの方法論の提示でもあった。GALLERY1からガラスを隔てて対面する中庭最奥の壁面に、前述の方法論を見事に体現した思想家・多木浩二撮影の「谷川さんの住宅」(1974年)と「上原通りの住宅」(76年)の大判写真を置いて、言葉と写真による「永遠性」を立体的に構成した。



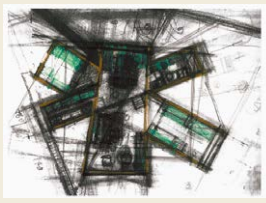
大橋晃朗真筆の「白の家」矩計図。
courtesy of Shin-ichi Okuyama Lab., Institute of Science Tokyo

中庭から外階段で1層上ったGALLERY2では、大学退官後の篠原アトリエに接合された自邸「ハウスインヨコハマ」(85年)の主室空間をオリジナル家具の再制作などによって再現した。この空間は、晩年の篠原にとってスケッチを描く作業場でもあった。「ハウスインヨコハマ」と未完の遺作「蓼科山地の初等幾何」(2006年、計画案)の数多くのスケッチ原図の提示によって、空間構想のプロセスに宿る「永遠性」をご覧いただきたい。

＊1　Virta Campus (https://www.design-museum.de/en/information/virta-campus.html)
家具デザイナー。1938～92年。62年桑沢デザイン研究所卒業後、東京工業大学(現・東京科学大学)にて篠原一男に師事。



篠原一男真筆の
「ハウス イン ヨコハマ」(1985年)
スケッチ。
courtesy of Shin-ichi Okuyama Lab., Institute of Science Tokyo



篠原一男真筆の
「蓼科山地の初等幾何」
(2006年・計画案)スケッチ。
courtesy of Shin-ichi Okuyama Lab., Institute of Science Tokyo



篠原一男真筆の
「谷川さんの住宅」(1974年)
スケッチ。
courtesy of Shin-ichi Okuyama Lab., Institute of Science Tokyo

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと、
お役に立つ情報を心がけています。
あわせてご注目ください。

N News

TOTOの最新情報

News 2

世界最大規模の国際見本市「ISH2025」へ出展しました

TOTOは3月にフランクフルトで開催されたISH（International Sanitary and Heating）に出展しました。コーポレートメッセージ「Life Anew」のもと、その世界観を体現する緑豊かな展示空間で「きれいと快適」「環境」を両立するサステナブルプロダクツが実現するバスルームを紹介。最新モデルの展示も行い、来場者から好評をいただきました。

ウェブ→
https://www.toto.com/jp/ISH2025/



News 1

腰掛便器や混合水栓などでEPD（環境製品宣言）を取得

腰掛便器や混合水栓などの一部の商品で環境製品宣言（EPD）を取得しました。今回取得したEPDは、原材料調達から製造、物流、使用、廃棄・リサイクルまでの製品のライフサイクル全体の環境影響を算出し、第三者検証を受けて、製品の環境負荷を定量的に開示するものです。TOTOは環境配慮の一環として、持続可能な事業活動のための重要なステップと位置づけ、今後も主要商品においてさらに認証取得を広げていく方針です。


腰掛便器　ピュアレストシリーズ


混合水栓

News 3

TOTOギャラリー・間が40周年を迎えました

1985年10月にオープンしたTOTOギャラリー・間は、今秋40周年を迎えます。
建築専門ギャラリーとしてこれまで178回の展覧会を開催してきたほか、どなたでも参加いただける展示ガイドツアー、学校向け教育プログラム、ギャラリートークやワークショップなど多彩なイベントを開催、延べ157万人の方に参加いただいています（*）。今年度は40周年記念企画として「篠原一男展」（56〜57ページ参照）「（仮）1980年以降生まれの建築家展」（2025年7月24日〜10月19日）「（仮）マリーナ・タバサム展」（2025年11月21日〜2026年2月15日）を開催します。ぜひご来場ください。
*2024年12月現在。
国内外での活動総数。

ウェブ→
https://jp.toto.com/gallerma/index.htm


大西麻貴+百田有希 / o+h展：生きた全体——A Living Whole（2024年）
© Nacása & Partners Inc.

『TOTO通信』送付先の変更などはこちらへご連絡ください。→ Tel 093-563-2055
お問い合わせは
TOTO通信
データ管理室まで

B Book

TOTO出版のお知らせ

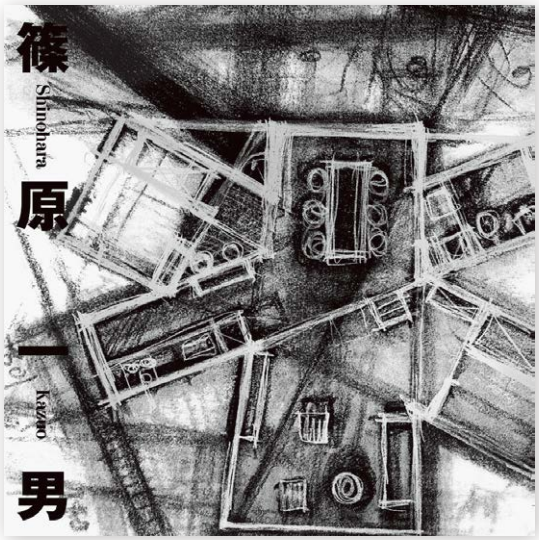
『篠原一男』

建築家・篠原一男自身の手によって編まれた作品集『篠原一男』(1996年発行)を、生誕100年となる2025年4月に復刻します。篠原氏は、本書の刊行と一連の建築業績が評価され、第38回毎日芸術賞特別賞を受賞しています。アンビルトを含む全作品と書き下ろし論文を掲載。本書で初公開されたドローイングも必見です。

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で3名の方にプレゼントいたします。

Present!→

著者	篠原一男
定価	16,500円 (15,000円+税10%)
体裁	300×300㎜、上製、 416ページ
発行	2025年4月



I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

3F TOTOギャラリー・間
電話／03(3402)1010
定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始
入場料／無料
※最新情報は、TOTOギャラリー・間ウェブサイト(https://jp.toto.com/gallerma)をご参照ください。

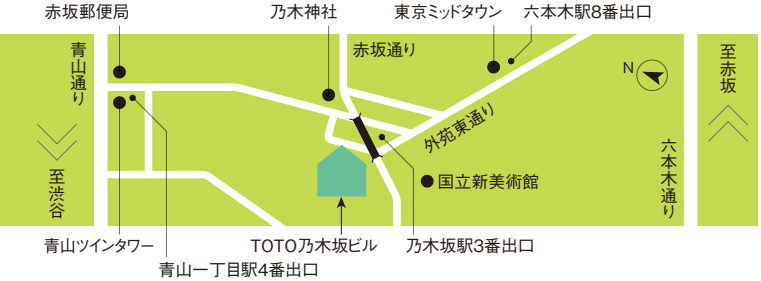
2F Bookshop TOTO
電話／03(3402)1525
定休日／月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始
※詳細はBookshop TOTOウェブサイト(https://jp.toto.com/bookshoptoto)をご参照ください。

2F TOTO出版
電話／03(3402)7138
全国の書店でお求めください。
直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。
※最新情報は、TOTO出版ウェブサイト(https://jp.toto.com/publishing)をご参照ください。

B1・1F セラトレーディング
電話／03(3402)7134(東京ショールーム)
定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始
※事前予約制。ご予約・展示品のご案内はウェブサイト(https://www.cera.co.jp/showroom)をご参照ください。

アクセス

●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分



C Cera

セラトレーディングのお知らせ

イタリア・FIMA社の「Flò」シリーズをご紹介



イタリア・FIMA社の「Flò」シリーズは、しなやかな曲線を描くレバーハンドルが特徴の水栓金具です。薄く、わずかにカーブしたレバーハンドルがデザインの中心を担い、有機的でエレガントなシルエットの水栓本体と調和しています。節湯機能が備わったタイプもあり、美しさと機能性を兼ね備えたシリーズとなっています。高さやカラーの違いによるバリエーションも豊富に揃え、こだわりの水まわり空間を実現します。

Flòシリーズ
水栓金具:FM3801H1-HS
希望小売価格:184,000円(税別)
当商品を掲載した「セラ総合カタログ2025」は
ウェブサイトよりご請求・閲覧ください。

ウェブ→
https://www.cera.co.jp/catalogue

次号『TOTO通信』は2025年7月発行の予定です。

TOTO通信　2025年春号

TOTO通信　2025年　春号　第69巻・第2号　通巻538号
発行日：2025年4月1日　発行所：TOTO株式会社　メディア推進部
〒105−8305　東京都港区海岸1−2−20汐留ビルディング24F　TEL.03(6836)2172

この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

TOTO



豊かな「癒やし、居心地、ゆとり」をもたらす「SYNLA」の先進機能



ファーストクラス浴槽
身体をやさしく
包み込む心地よさ



楽湯（肩楽湯・腰楽湯）
たっぷりのお湯で
肩と腰を心地よく刺激



調光調色システム
くつろぎの光を
気分にあわせて調節



床ワイパー洗浄（きれい除菌水※）
最新のクリーン技術で
床まわりのきれいが続く



おそうじ浴槽
ボタンひとつで
浴槽を自動で洗浄

※きれい除菌水は、汚れを抑制するもので清掃不要になるものではありません。除菌効果は実使用での実証結果ではありません。すべての菌を除菌できるわけではありません。

商品のお問い合わせは
TOTOお客様相談室　0120-03-1010　受付時間 9:00～17:00（夏期休暇・年末年始・当社所定の休日等を除く）

シンラ 商品ページ
https://jp.toto.com/products/bath/synla

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内　TOTO通信データ管理室　TEL.093(563)2055　FAX.093(571)0999

＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト（https://jp.toto.com）をご覧ください。